ロボット少女は恋をする

くろうんも

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ロボット少女は恋をする

【Ｎコード】
Ｎ７３１４Ｓ

【作者名】
くろうんも

【あらすじ】
自称普通の男子高校生、孔雀蓮飛鳥。飛鳥の妹という“設定”のロボット少女、ネネ。起動実験を称した共同生活を送るにつれ、ネネはいつの間にか飛鳥に恋してしまう。しかし、ロボット故にそれが理解できないネネは、恋愛感情という正体不明の感情に翻弄され、苦悩する。そんな中、飛鳥に好意を抱いているクラスメイトがいると知ってしまい、その苦悩をますます強めてしまう。

ロボット少女がいる日常（1）

「おにいーちゃーんっ！　朝だよぅーっ！　朝朝朝！」
まだ声変りもしていない少女のような、甲高いネネの声。なんて耳障りなのだ。睡眠不足の頭に直接突き刺さってくるような鋭い刺激に、飛鳥は肌蹴ていた毛布を手繰り寄せ、頭まで被って、申し訳程度の防音壁とする。当然、ネネの声を完全にシャットダウンするには至らない。
「ん”～～～……」
昨日、夜遅くまでネットの海に泳ぎ出てしまっていた自分を恨んだ。寝る前に普段よりも多く楽しんだ分、朝の苦痛は数倍にも膨らんでしまう。
「んもー！　おにいちゃん学校遅れる！　えいっ！」
次の瞬間。
衝撃が、飛鳥の体を襲った。それは、決して軽いものではない。内臓が口から出てきそうだと飛鳥に錯覚させるには十分過ぎる、強力極まりないものである。
「ぐぼほぉっ！」
「朝っ！　朝っ！」
耳障りなネネの声が、妙に遠くに聞こえる。
飛鳥は朝の目覚めと同時にショックで昇天しそうになってしまった。妹に押しつぶされて死亡。そんな間抜けな記事が明日の新聞の三面記事を飾り、ネネは、兄殺しの罪で施設に連れて行かれてしまうだろう。
しかし、一瞬天に召されそうになってしまっていた意識が、無事飛鳥の体へ帰還に成功した。口に付いた泡を拭いながら飛鳥が起き上がると、両足をバタバタさせながら、腹這いで飛鳥の腹部に乗っているネネをジト目で睨みつけた。兄を殺しかけたなんて露知らない、残酷なまでに無邪気な笑みを浮かべているのが憎たらしい。

「あっ！　起きたお兄ちゃん？　朝ごはん出来てるよう！」
「……お前にはロボット三原則は適用されんのかーっ！　人間を殺しにかかるとは何事かーっ！」
ちゃぶ台返しよろしくネネの体を弾き飛ばそうとしたが、インドア派で非力な飛鳥では、ネネの重量を弾き飛ばすことなんて叶わない。腕が肘の部分で曲がってはいけない方向に曲がりそうになったので、諦めることにした。
「どけーっ！　これか！　これがいいんかこれがーっ！」
結局、飛鳥が出来ることと言えば、無邪気にこっちを向いて微笑んでいるネネのプニッとしたシリコン製の頬を両手の指で摘まんで、グイグイ引っ張ってやることくらいだった。
「いたたたた！　ちぎれちゃう！　ちぎれちゃうよおにいちゃん！」
という感じで、兄という設定のただの人間たる飛鳥と、妹という設定の人型情報端末たるネネ、二人の共同生活、二週間目の朝が始まったのである。

ロボット少女がいる日常（2）

目玉焼き。焼き魚。味噌汁。納豆。ご飯。
王道過ぎてまるで漫画の世界のメニューのような朝食が、フローリングの上に置かれた四角い卓袱台の上に並んでいる。
見るからに素晴らしい焼き加減の魚や、半熟でプルプルの目玉焼きが、視覚的にも、嗅覚的にも、飛鳥を刺激する。
「……いただきます」
しかし、それでも飛鳥には味を楽しむ余裕はあまりなかった。まだ、食欲よりも眠気の方が強い。あんなアグレッシヴな起こし方をされて、瞬間的に眠気が吹き飛んでも、三時間しか眠っていない脳にとっては、まだまだ休息が必要であることに変わりはなかった。
「ねえねえねえ、どうかなぁ？」
飛鳥の体面に座る、ピンク色のパジャマ姿のネネが、右手に端を握りしめたまま、眩いばかりの期待の眼差しビームを飛鳥に照射している。ネネの前にも、飛鳥と同じメニューが置かれているが、飛鳥が食べるまでは食べる気が無いらしい。
味噌汁を一口すすった。
「……うん。おいしいよ？」
寝起きで鈍感な舌では、ネネの料理を楽しむことが出来ない。ただ、これは不味いものではない、という識別は出来た。
しかし、この二週間で、ネネの料理の腕は嫌というほど味わってきた。最初は、ロボットなんかに料理が出来るのか、という心配があったのだが、そんな心配は初日の夕食で完全に置き去りにしてきた。今も、ネネの料理を味わうのは難しいが、今までのネネの実績から言ってネネが不味い料理を作るわけがない、という確信があった。だから、飛鳥のセリフは全くの真実である。
「ふっふーん」
ネネは、誇らしげに、そのまな板と形容するしかない哀れなまで

に平たい胸を反らした。
「味が薄いけどね」
飛鳥は、遠まわしにネネに抗議した。確かにネネの料理は美味しい。しかし、飛鳥はネネが来るまでは一人暮らしで、自炊をしていた。そして、その味付けは男の料理そのものである。つまり、塩分多めで大味なメニューだったのだ。そして、そんな味付けに慣れた飛鳥にとって、ネネの料理は微妙に物足りないものである。
再三言っているのだが、一向に味を濃くしてくれない。ネネ曰く、
「おにいちゃん、高血圧で死んじゃうよ？」
だそうだ。飛鳥の体を気遣ってくれるのは、とてもうれしい。しかし、飛鳥にとっては少しだけ有難迷惑であった。
「夕飯は辛いものがいいなあ……」
「カレーでも作っちゃう？　でも、一晩寝かした方が美味しくなるから、出来るなら明日にしたいんだけど……」
美味しい、不味い、という判断というのは、非常に単純な判断である。しかし、それは人間を基準に考えた難易度のそれであり、機械にその判断をさせるのは、かなり難易度が高いことだ。その判断を余裕でやってのけ、更に自分の手で美味しい料理を作ってしまうネネ。今でも、飛鳥は疑問に思う。本当に、ネネはロボットなのか、と。
飛鳥が食べている姿を見て、ネネは嬉しそうに自分の目の前の料理を食べ始めた。箸を上手に使って口へ。咀嚼し、嚥下し、再び箸を使って口へ。
世間一般では、ロボットをいかになめらかに歩かせるか、ということに各メーカーが尽力しているというのに。この目の前にいる機械仕掛けの少女は、それを軽く超越して何千歩も先に進んでしまっていた。
その百三十センチ前後しかない矮躯からは考えつかないほど重い体重と、ルビーのように赤い瞳くらいしか、少なくとも人間ではない、と判断できる材料になりえない。それほど、ネネは人間じみて

いた。挙動、思考能力の部分では、機械であると判断可能な材料は皆無である。

飛鳥は、ある意味畏怖を感じていた。こんな非常識な存在のネネに。そして、そんなネネを開発してしまった、自分の父親を。

いくら考えても、ネネの駆動原理が全く理解できない。だから飛鳥はあまり考えないことにしている。

柔らかい魚肉と、パリパリの皮。それを、御飯と一緒に口に入れる。ちょっとだけ味覚がはっきりしてきた舌に、魚の香ばしい味が広がった。

ロボット少女がいる日常（3）

朝食を食べ終わっても、時間的にはまだ余裕がある。そうなるようにネネが早めに飛鳥を起こしているのだ。更には、通っている学校は徒歩十分のところにある。最悪、始業十分前のチャイムが鳴ってから家を出ても走れば間に合ったりする。

だからこそ、朝こうしてのんびり朝食がとれるわけで、飛鳥の体は、ネネの健康的な料理と相まって健康体そのものであった。

ネネが歯磨きに行っている間に飛鳥が制服に着替え、交替で飛鳥が歯磨きに行っている間にネネが着替える。このサイクルを毎朝繰り返している。

最初はネネは兄妹なんだから気にしなくてもいい、とは言っていた。しかし飛鳥的にはやはりいきなり出来た妹であるから意識しないわけにもいかないらしい。たとえネネが、どう見積もっても小学生にしか見えなくてもだ。

「おーい、行くぞー」

洗面所から玄関に直接向かい、ネネを呼ぶ。

「はーい、はいはいはい！」

奥からネネがバタバタ動き回る音が聞こえ、居間から小走りで出てきた。

襟が赤いセーラー服と、同色のスカート。ネネは、一般的に言えば二次元の産物であると言って差し支えない物品を着ている。

二次元の世界では非常によく見るものであるが、実際にお目にかかる機会が有るとすれば、クレーンゲームの景品だとか東急〇ンズだとかに売っている、所謂”コスプレ”のためのちゃっちい物しか見ることはできないだろう。

日本広しと言えど、こんなものを制服にしている学校というのは、おそらくはよほど奇特な学校であり、そして、飛鳥が通う”私立翠龍学園”こそ、そのよほど奇特な高校の一つである。

制服に関しては校長および理事の変態的嗜好が原因であるとの噂もあるが、定かではない。
そして、未だにプールの授業では旧型のスクール水着を指定していることも、校長および理事の変態的嗜好が原因であるとの噂もあるが、定かではない。
更には体育の時間に未だに女子はブルマ（赤）着用を義務付けていることも、校長および理事の変態的嗜好が原因であるとの噂もあるが、定かではない。
と言うわけで一般的に言えば校長および理事が変態であると言える翠龍学園は、類は友を呼ぶ形で生徒も一般的に言えば変態である。この学校に行っていると言っただけで近隣住民からは変態扱いである。自称一般人の変態の飛鳥は、非常に不本意に思っていた。
しかし仕送り有りの待遇で一人暮らしをさせてもらう条件として、翠龍学園への進学があったのであるからして、文句は全く言えない。
「おまたせぇー、おにいちゃん。あ、お弁当ね」
二つ持った弁当の大きい方を飛鳥に手渡し、小さい方を補助鞄に突っ込む。
そして、白いオーバー二―ソックスに包まれた足を子供サイズな革靴に突っ込み、その場で一度ピョンと飛び跳ね、準備完了の意を飛鳥に告げた。
先ほどまで背中に垂らしていた赤毛に近い茶髪を頭の両サイドで二つに纏めた可愛らしいツインテールが揺れ、赤いスカートがひらひら舞い、その中身の白と青の縞縞パンツを一瞬だけ拝むことに成功。それによってちょっとだけ動揺した飛鳥だが、そんなこと露知らず、ネネは微妙な表情をしている飛鳥を見て不思議そうに首をかしげるばかりだ。
「……行くか」
飛鳥は弁当を入れるために下ろしたリュックサックを右肩にぶらさげた。
「うんっ！」

開けたドアの外は、狭い通路になっていた。飛鳥の胸くらいの高さまでのコンクリート製の壁があり、その向こうには目も眩まんばかりの高さからの風景が広がっている。
ここはマンションの十階であった。
ドアを閉め。施錠し、少し離れたところにあるエレベーターに乗り込んだ。
「それでね！　月代さんと一緒に今度買い物に行こうって――」
「あ、ああ、そう……」
飛鳥は、人とコミュニケーションするのが苦手であった。それはネネ相手でも例外ではなく、ネネが、開発者によって作為的にインプットされた非常識な言動をしたときに突っ込む時以外は、自分でしゃべることは少ない。対照的なネネは、飛鳥のリアクションが薄くても気にせずにマシンガントークを繰り広げているが。
エレベーターが四階に止まる。飛鳥は嫌な予感がした。
そしてその嫌な予感通り、エレベーターが開いて、ネネと同じ制服を着た女子が乗り込んでくる。
飛鳥のクラスメイト、美崎月代である。
「おっ、飛鳥にネネちゃん！　おはよう！」
「おはようございます、月代さん！」
言いながら、パチン、とハイタッチを交わすネネと月代。ネネのハイテンションを受け止め、更にその上を行くテンションで返すハイテンションな女子である。
その性格は外見にも顕著に現れていて、こげ茶色のショートカットに吊り気味の相貌が、いかにも男勝りですと語っていた。
そしてそんな性格ゆえに誰とでも友達になることが出来た。やっぱり飛鳥とは対照的な人物であった。
そんな、自分とは両極端の場所にいる女子二人の騒がしいコミュニケーションを、飛鳥は少し引いたところから見ていると、月代が思い出したように飛鳥の方を向いた。
「おっ、そういえば飛鳥」

エレベーターが止まり、一階への扉を開く。ネネ、月代、飛鳥の順で外に出て、三人で横一列に並んで出口へと向かう。
「……何だよ？」
「情報の宿題後で見せろよ。パソコン検定の問題集とか明らかに無理だろ」
マンションを出て、住宅地の道路を歩いていく。
「古典の宿題と交換な。パソコン検定いっても五級だろ。一般常識としてそれくらい知ってろよって感じだけど」
「未だにビデオテープの予約録画ができなくて、弟妹に漫画録画してくれーって言われて困っているのに。あいつら歳取ったら何でもできるようになると思ってやがる。で、ようやく録画の方法が分かってきたと思ったら、今度親父のボーナスで今流行りらしい”はいびじょんてれび”と”ぶるーれいれこーだー”とやらを導入するらしくウチにはもう何が何やら。そんなウチにパソコンなんて、パンドラボックス甚だしい存在だぜ」
どこのメカ音痴の主婦だよと思うが、飛鳥の母親もこんなもんらしいし、分からない人にはトコトン分からない世界で説明しても理解してくれないんだよなーと思う飛鳥である。
「ま！　ウチには飛鳥という存在がいるからな！　その時にはよろしくな！」
と、バシバシ背中を叩いてくる月代だが、飛鳥は露骨に嫌な顔をした。
「夜七時に十階から四階に下りる俺の苦労を分かってくれ」
食事中に呼び出されて何が悲しくてよそ様の家にアニメの録画をしに行かねばならないのか、と思いつつも、月代の母親に
「あらあらいつもごめんなさいねえ、飛鳥君。後で肉じゃが持って帰ってちょうだい」
などと心からの笑顔で感謝されてしまっては、めんどくさくても断るに断れない。
「あ！　ネネ分かる！　ネネが行ってあげるよ！」

はいはーい、と、月代と飛鳥の間から鞄を持ってない方の手を上げてピョンピョン跳ねながら、ネネが名乗りを上げた。
「おっ！　ネネちゃん”ぶるーれいれこーだー”の使い方分かんの！？　やったぁ！」
説明書を見れば一発で記憶できるのだから、後はそれを模倣すればいいだけ。機械が最も得意とする作業ではないか。とは口が裂けても言えない。ネネは飛鳥の妹という設定なのだから。
「行く行く！　お役にたてるなら！」
「やったね！　やれやれ。少しはネネちゃんを見習ったらどうだ。飛鳥はこんなんだから英語国語古典その他諸々が出来ないんだ」
「う、うるさいなー。昔の人が書いた文章から作者の気持ちなんて読み取れるわけねーだろ！　エスパーか、エスパー！」
文系人間と理系人間は絶対に相容れないと思う飛鳥であった。

ロボット少女がいる日常（４）

住宅街の中に空気を読まずにデカデカと構えた近代的な校舎を持つ、翠龍学園。
近隣住民には変態の巣窟として疎まれ気味なこの学校に、飛鳥は通っている。
ネネが来る前は、近いから、と油断していつも遅刻ギリギリで走り抜けていた校門も、今では始業三十分前に通るのが日常であった。おかげで、いつも早めに行っている月代と一緒に登校することも多くなっている。正直、飛鳥は月代が苦手である故に、少しだけ疎ましかったが。
「じゃね！　おにいちゃん！」
「おー」
昇降口の一年生の区画から、ネネが手を振る姿を見て、飛鳥も軽く片手を挙げて返した。その隣の月代も、ネネと同じようにブンブン手を振っている。
飛鳥と月代は二年生。ネネは一年生であった。とは言ったものの、ネネの場合一年生ですと言っても相当苦しい、幼い外見をしているが。
「いい子だよなあ、ネネちゃん。飛鳥の妹とは思えないぜ」
「そりゃあどういうことだよ。……まあ、正直、ネネが来て相当助かってる。料理の味が薄いのが不満だけどな」
昇降口から、階段を昇っていく。
「いいじゃん、素朴な味。飛鳥はおこちゃまのお口でちゅねー」
「うるせえ」
おどける月代に、飛鳥も子供っぽく不貞腐れてみせる。半分本気、半分冗談で。
「ははは。……ああ、飛鳥。ウチ、図書室行くからさ。またあとで」
「おう」

二階まで上がってきたところで、月代はそう言い残して行ってしまった。
飛鳥は、別にその背中を見送ることもなく、ようやく解放されたか、と息を一つついて、三階への階段をのぼる。
そして、踊場に来て体の方向を変えたとき。
「あ？」
ふと、階段の下の方に微妙な違和感を感じて立ち止まった。何やら人影が、飛鳥から隠れるように動いたような。
階段の下の防火扉の影の方をしばらく見てみたが、特別変わったところはない。
気のせいか、と、飛鳥はまた足を進め始めた。
三階で階段を離れ、教室くらいの幅がある廊下を歩いて三つほど教室を通り過ぎた所に、飛鳥の教室がある。
まだ時間が早いせいで、教室には数人しか生徒がいない。飛鳥の姿を確認しても、誰も特には気にしていないし、飛鳥も別に気にしない。教室の前の方で談笑している男子生徒うちの一人が軽く手を挙げたのを見て、飛鳥も礼儀として軽く頭を下げる程度だ。
教室の左から二番目。前から四番目の席が、飛鳥の席である。漫画などの主人公の席となると教室の窓際の一番後ろと相場が決まっているらしいが、残念ながら飛鳥の席からは桂馬跳びで離れている。飛鳥としては微妙に羨ましかったりした。
自分の席に座り、肩にぶら下げていたリュックサックを下して、机の横にあるフックに引っかけ。そして、カバンの中から本を取り出して、読み始めた。ただし、その内容は職業エンジニアが読むようなソフトウェア開発の本であるが。
飛鳥は高校生にしてパソコンマニアであった。家には年に二度構成パーツを最新型に更新してきた自作パソコンがあったりする。ちなみに言うと、いざという時に使えるようなジャンクパーツなんかも床とかに転がっていたのだが、ネネに問答無用で整理整頓させられて、物置の奥に押しやられてしまった。棄てられなかっただけよ

しとしよう、と思っている。
飛鳥は、本を読むのに没頭していた。家ではネネが騒がしいし、学校では月代が騒がしいし。自分の世界に入り込む暇がなくなってしまっているゆえに、こういう時間を大切にしたいと思う飛鳥である。
傍から見れば気持ち悪いと思われるかもしれないが、この学校にはもっと気持ちの悪い集団が存在しているし、理事校長からして制服に妙なこだわりを持つような変態な学校である。飛鳥にとっては、絶好の隠れ蓑であった。特別変な眼で見られたことはない。
飛鳥が変な眼で見られていることに気づいていないだけなのかもしれないが。知らぬが仏、である。

ロボット少女がいる日常（5）

「……きめえ」
「うるせえ」
始業五分前に飛鳥の隣の自分の席についた月代に邪魔され、飛鳥の一人の時間は終了した。

数学。古典。音楽。物理。淡々と授業をこなす。ちなみに言うと古典の時間は貴重な睡眠時間である。公立高校を定年で追い出されたお爺さん先生の睡眠音波に抵抗することなど、飛鳥には不可能であった。ただでさえ今日は睡眠時間が足りていないというのに。
昼休みの時間。高校に入った当時は、群れてご飯を食べて何が楽しい、という、若干にして中学二年生病気味だった飛鳥も、結局は月代に振り回されて、月代に近しい人物2人と共に昼食を取るのが常であった。
一人は、曽我部詠輝。飛鳥とは対極の場所にいそうな、華やかな印象を与える男。外国人の血でも入っているのだろうか、若干日本人離れした顔つきは、どこのモデルだと言いたくなるほど。クラスの中でも図抜けた容姿を持つ彼は、学力の面でも全教科そこそこなし、スポーツは超絶万能。情報と数学くらいしか取り柄が無く、地味な外見の飛鳥とはまさしく月とすっぽんな存在である。
「っー！」
飛鳥は、弁当を開けて、すぐに閉じた。時々ネネは弁当でテロリズムを行うことがある。前例を言うと、ネネが来て三日目のタコさんイカさんカニさんウィンナーの軍団。その四日後の、チャーハンを、ゆるキャラとして有名な“ラリックマ”の形状に成形したもの。等等。それでいてやっぱり栄養バランスなどは考えられていて美味しいのだから強く文句も言えない。

しかし、今日の弁当はひどい。紅そぼろでハートマークなどと、どこの昭和センスな愛妻弁当だよ、と。
「ねっ、ねね、のやつ……」
「おっ、今日のネネちゃんお手製お弁当はなんだい！？」
飛鳥が狼狽してつぶやいた、ネネ、という単語を聞いてまっさきに食らいついたのは、あろうことか詠輝であった。女性関係のお話には苦労しなさそうな外見をしていないというのに。
「……ハートマークだった」
周りの人に見られないよう、この集団だけに見れるように蓋を半開けにして、弁当を示した。
「くぅー、かわいいじゃないかーっ！　さすがネネちゃん！」
ネネが学校に通うようになって以来。詠輝は結構露骨にネネに夢中になっていた。
それは、彼に始まったことではない。彼は、“美少女研究会”なる文系部活動の部長であり、その美少女研究会の部員全員が、只今ネネフィーバー中であった。曰く、開校以来の美少女だ、と。
彼ら美少女研究会こそ、この学校が変態の巣窟扱いされる原因であった。その活動は、美少女を遠くから眺めてハァハァしたり、変な虫が寄り付かないように暗躍することらしい。その活動は校外にまで及んでいるらしく、近隣住民からは不気味がられている。
そしてそんな部活が、部員数がどの部活動よりも多いという時点でこの学校は異常であった。ついでに言うと、顧問は校長である。
とは言ったものの、彼ら変態のおかげで、一般的に言うと気持ち悪がられるような飛鳥ですら一般人であるが。
「いや、やられるこっちはたまったもんじゃ……」
「じゃあくれっ！」
「断る」
そんなやり取りを見ていた月代が口をひらく。
「随分とネネちゃんに入れ込んでんだな？」
笑いながら。しかし、その笑みには黒いものが含まれているのが

わかった。
　その声を聞いて、飛鳥に襲いかかっていた詠輝が縮こまる。
「い、いやー、美少女研究会の部長としてだなあ。俺は幼稚園のころからお前だけを見てるよ月代」
　と、右手を月代に差し出し、首を軽く振りながら演技のような口調で言った。一般的にはドン引きされてしまいそうなセリフも、彼が言うと様になった。
　しかし、月代はそんな詠輝を少しジトッとした眼で見ている。
　月代と詠輝。二人は、詠輝の台詞の通り、幼稚園の頃からの幼馴染であった。
「どうだか。なー、瑠璃」
「え、えっ？」
　と、月代は目の前にいた小柄な女子に話を振った。
　肩にかかるくらいで切り揃えられた黒髪と、レンズの厚いメガネをかけた、パッと見ると飛鳥以上に地味そうな女子である。
　四柳琉璃。月代がいつもペットのように連れている、図書委員である。今朝も、月代が図書室に行ったのは彼女に会うためらしい。
　話を振られた琉璃は、しかしあっという間に挙動不審になって目を伏せてしまった。極度の恥ずかしがりやで人見知り。彼女が月代以外の人間とまともにコミュニケーションをとっているところを、飛鳥は見たことがない。
　眼鏡の奥にある円らな瞳は、まるでチワワ系の小動物を連想させる。地味なオーラに隠れてしまっているが、その容姿は上品に整っているのがわかる。
「ははは、悪い、瑠璃。でももうちょっと頑張ってしゃべろうぜ、な？」
「あ、あう……」
　月代は、そんな琉璃姫の黒髪をチョイチョイと撫でつける。
「まあ、実際、部員たちのボルテージの振り切れちまってるからなあ」

ふざけるような笑みを浮かべていた詠輝の表情に微妙な陰りが混じった。
「……大丈夫なのかよそれ。お前んところのやつら、過激なやり口でも有名だっただろ」
と、月代が少し心配そうに言った。
小学生の少女に対して性犯罪を働こうとした男が彼らによって半殺しにされて病院送りになった事件は、この近隣住民の記憶に新しい。この学校に来るために引っ越してきた飛鳥は知らないが。
「俺が手綱を握ってる以上、妙なまねは絶対にさせないよ」
そう言うと詠記は、自分の弁当をつつき始めた。大きな弁当箱に白ご飯がミッシリ詰まった日の丸弁当であった。

ロボット少女がいる日常（6）

飛鳥は部活動等には属していない。
運動は苦手故に運動部になんて論外であるし、一時期いわゆる“情報部”と微妙にカッコいい名前のいわゆる“パソコン部”に所属していたが、レベルの低さに絶望してあっという間に幽霊部員になってしまった。趣味でフリーソフト開発なども行っている彼からすれば単なる時間の無駄であった。
夕食の準備をしなくてはいけない、という理由もあったのだが、それはもう通用しない。
「あ、おにいちゃーん！」
昇降口を出たところにある中庭のベンチに座っていたネネが、飛鳥の姿を確認して手をブンブン振り回し、駆け寄ってくる。
「今日はスーパーでタイムサービスやるんだよ！　行かないと！」
「んあー、そうだな」
ネネが来る前は、飛鳥がやっていた家事全般を、ネネにほぼ全て取られている。しかし、全部押し付けるのもどうかと思った飛鳥は、せめて買出しくらいは、ということで、二人して学校帰りにスーパーに行くのが日課になっていた。
「お肉が安いんだよ！　カレー用に煮込むのがいいね！　だけどやっぱり明日に回さない？」
そういえば朝そういう会話をした気がする。ネネにはネネなりのこだわりがあるらしいから、逆らうわけにもいかないし、そもそも別にカレーでなくても飛鳥は全然いいのであるが、ネネはどうやら曲解しているらしい。
「僕は別にどうだっていいよ。でもやっぱり辛いものがいいなあ、久しぶりに。中華？」
「うーん。だけどうちのコンロってＩＨだから中華は……」
「そこまで本格的にやらなくても。中華風炒め物程度でさ。そもそ

も中華鍋なんて……」
飛鳥はそこまで言って、言葉を切る。
数歩先に進んだネネは、立ち止まって、背後をじっと見つめている飛鳥の方を見て、首をかしげた。
「どうしたの？」
「……いや、別に。最近なんか見られてる気がしてさ。気持ち悪いんだよ」
今朝もあった、妙な視線。それがどんな類の視線なのかは分からない。
しかし、視界の中に入る、下校中の生徒たちが歩く中庭の風景に異常は見られない。
「気のせい、か……」
「おにいちゃん。何か心の病気なんじゃない？　人に見られているような気がする、っていう症状とかも……」
「まさか。僕は毎日気楽に生きてるよ。ネネがうちに来てくれて、めんどくさいことも全部引き受けてくれるから、ますます気楽に。このままではダメニンゲンニナッテシマウー」
と、飛鳥はそう自虐を言い、バカバカしい、と、両手を肩の高さに挙げて首を振った。
ネネも飛鳥の見ていた方を注視してみるが、変なところは見当たらない。
「行こう。タイムサービス始まるんだろ？」
「あっ。そうだよそうだよ。早く行こう！」
言って。ネネは、飛鳥の手を握り、ツインテールをピョコピョコ揺らして歩き始めた。

ロボット少女がいる日常（７）

「学校の授業ってどうなんだ？」
スーパーからの帰り道。ふと思いついたように、右手にネネが持参していたエコバッグをぶら下げた飛鳥が問う。
問われたネネは、ちょっとだけ渋い顔をした。その反応に、飛鳥は意外だと思った。
ネネはもともと、起動実験として飛鳥の傍にいる。社会に溶け込めるか否か、を確認するために。故に、学校初日に、突出した行動は控えた方がいい、と飛鳥は言った。例えば数学などでロボットゆえの異常な演算能力を発揮したりだとか。加減が分からないのだろうか。
「難しいよ。国語とか。文脈を解析したりするのは出来るけど、作者の気持ちなんてわかるわけないじゃん？」
今朝、飛鳥が言ったことをそのまま言ってのけた。そう。つい忘れがちであるが、ネネは悲しいまでにロボットなのであった。国語の問題ならまだしも、人間の気持ちを読み取るというのは、人間でも完璧にこなすのは不可能に近い、曖昧な作業を、ロボットたるネネにできるわけがない。
「僕と同じだねえ。理系の最高峰がネネということか」
マンションに入り。エレベーターに乗り込む。１０階のボタンを、ネネが押し、不服そうな表情をした。
「数学は出来るんだけどなぁ」
「９８５３２４８６５２×９５６３２４は？」
「９４２２８９８１６３８７５２４８（約０．５秒）」
もちろんそれが正しいということは飛鳥には分からない。
数十桁の四則演算や複雑な微分積分なども数秒で軽くこなすネネの天敵は国語であった。
バランスがとれていいのではないだろうか、と飛鳥は思う。転入

当日の数学の実力テストで１００点を軽く取ってさっそく目立ちまくったネネには、国語ができないくらいの欠点があった方がリアリティがあって良い。
エレベーターが十階に止まり、通路に出て飛鳥の部屋へ。
鍵を回すと、違和感があった。開錠する方向へ鍵を回しても、空回る。その代わり、閉める時の方向へ回すと、軽い抵抗の後に、ガチャン、という作動音。
飛鳥は、首を傾げてもう一度開錠する方向に回して鍵を作動させ、ノブを握ってこちらに引っ張った。
キィ、と音を立てて、ドアが開く。
「……開いてる？」
「ど、泥棒！？」
ネネが慌てた声を上げる。しかし、飛鳥は玄関に置いてある靴を見て、ひとつ溜息をついた。
「父さんだ」
あからさまに嫌悪感たっぷりな表情と口調で言い、ドアを全開にして中に入った。
「えっ、ハカセ？」
飛鳥と対照的に、ネネは嬉しそうに息を弾ませる。
玄関を抜け、廊下の奥にある居間へと入った。
「何をしに来た変質者」
開口一番に罵り言葉を吐いた飛鳥に、卓袱台のところで表紙に萌え萌えした美少女が乱舞している文庫本片手に勝手に淹れたであろう茶をズルズル啜っている、父親としてはあまり理想的とは言えない姿を見せている飛鳥の父親、和飛が渋い顔をする。
「むっ。父親に向かってその口調は何だね？」
「父親気取りたいんだったらまずは父親らしい姿を見せてほしいものだね」
「わーい、ハカセー」
和飛の姿を見たネネが、ふざけて和飛に飛びついた。しかし、飛

鳥と同じく見るからにインドア派な和飛に受け止められるはずもなく。

「ぐほぉあああ！　質量７８．９ｋｇがあああ！」

なるほど。どおりで重いわけだ、と納得しながら、飛鳥は箪笥を漁って部屋着を引っ張り出すのであった。

ロボット少女がいる日常（8）

「じゃあ何かお菓子作るね？」
「ああ、貰おうか」
「帰れよ」
いかにも不服そうな飛鳥の文句は聞き届けられず、ネネは制服の上からエプロンをつけて、居間に至るまでの途中にある台所へと行ってしまった。
飛鳥的には、この親と会うのは一年に一回でお腹いっぱいである。しかし、今年はもう正月に実家に帰った時に出会っている。すでに過食状態である。
飛鳥は、ため息交じりに卓袱台を挟んだ和飛の反対側に座る。
「で？　どうしたんだよ。ネネに関しては何も問題ないと思うんだけど」
ネネのコンディションは遠く離れた、和飛が所長を務めるロボット研究所で常時チェックをしているはず。そして、ここ数日を振り返っても、全く問題はなかったはずである。
だが、こうして開発者がここにわざわざ来ているということは、なにかあるということを暗に示しているはずである。
「うむ……実はな」
文庫本を置き、机に両肘をついて、指をからませ合った手を口元に当てた。その表情は、いつもの大人気ないほど明るい和飛からは考えられないほど、シリアスなものである。
飛鳥は、生唾をひとつ飲んで少しだけ身構えた。こんな表情の和飛、見たことが――
「椎葉がな……ついに過去最高レベルで切れてしまったんだ」
「……帰れよ」
「ワタクシとそのテレビの中の女の子、どっちがいいんですか、って……」

「どうせテレビの中の女の子って答えたんだろ」
わかりきったことである。和飛の二次元倒錯ぶりは異常なのだ。結婚して飛鳥が誕生したこと自体が奇跡に近い程度に。
椎葉というのは当然和飛の妻、飛鳥の母。和飛のどこに惚れて結婚したのか、未だに飛鳥には理解不能である。
「ああ、パソコンのモニターをテレビと言い放つ椎葉が可愛くて可愛くて……つい、悪戯をしてしまったんだ。調子に乗っていたら撲殺されそうになった」
つまり。和飛がアダルトな恋愛シミュレーションゲームを嗜んでいたら、その姿に妻である椎葉が切れたわけだ。確かに、そんな父親の姿、飛鳥でも見たくはない。
「夫婦喧嘩で息子の所に逃げ込んでくる父親ってどうよ。威厳もへったくれもないだろ。もともとないけど」
「いや、それはわかっている。情けないことこの上ないと自負している。しかしだ、お前も知っているだろう、椎葉の武力を……！関節がいくつ外されたと思っている……」
と。和飛は両腕を抱いてガタガタ震え始めた。確かに、年に一度か二度、椎葉にボロボロにされる和飛の姿を幼いころより見てきた飛鳥としては、理解できないわけではない。
「……いや、マジで帰ってさっさと謝れよダメ人間」
「おお、父親に言葉の槍を突き刺すか、息子よ。だがそれではいそうですかと聞けるほど人間が出来てないものでな！　ほとぼりが冷めるまで三日ほど泊まらせてもらうぞ！」
さも当然のごとく言い放つ和飛。仕送りなどで世話になっている故に、強く拒否することは出来ないのは確かだ。
しかし、和飛に非があるのは火を見るよりも明らかであって同情する余地も無いが。
息子ながら、この夫婦は今までよく持ったな、なんて本気で思ってしまう。だからといって家族霧散するような事態は頂けないが。
「はぁぁぁぁ〜〜〜〜〜〜……」

深く。深くため息をつくことしかできなかった。この親の下に産まれた不幸であった。

ロボット少女がいる日常（9）

せっかくいるのだから、と、飛鳥は和飛にネネのことを詳しく聞き出すことにした。あまりこの父親と親子の会話などしたくないが、相手はロボット工学の権威である。そういう理系な話に関しては別だ。お手軽に高レベルなお勉強が出来るとあって、飛鳥の知的好奇心は疼きっぱなしであった。

しかし、およそ現代技術では到達不能レベルな思考回路について飛鳥が言及したとき、和飛は苦笑いをしながら頭をガリガリ掻いた。

「……ネネの頭には、人間の脳をナノマシンを使って擬似的に再現したプロセッサが載っている。そこで人間的な思考をエミュレートするのが、基本的な動作原理なのだよ」

「脳、を……」

「そう。人間の脳を模倣する機械。私の目標に一つ近づく上で、最重要と言える部分だ」

「目標って、なんだよ？　ネネみたいなすごいものを作っといて、まだすごいことやろうってのか？」

「ネネは、未完成だ」

二人の間に、沈黙が流れた。飛鳥が絶句したことにより。あそこまで人間らしいロボットを作っておいて、未完成とのたまう、和飛の凄まじさに。

「私の研究所では主に産業用ロボットの開発を行っている」

それは、飛鳥も知っている。というか、孔雀蓮ロボット研究所と言えば、日本でも有数の技術を誇る産業用ロボット開発元として、結構有名である。

「しかしな、それは単に金になるからやっているだけのこと。片手間の開発費を稼ぐためにやっているだけ。……私たちからすれば、本当に鼻くそをほじりながらやっているようなものだ。しかし、私とて一人のエンジニア。大きな目標を持って研究を行っている。…

…人間と等しい思考をするロボットの開発。しかしネネは、ニアイコールと言うにも程遠い。ノットイコールだ。ロボット工学三原則に縛られている」

「ロボット工学三原則……」

「アイザック・アシモフの小説に出てきた、ロボットが従うべき原則だ。これがまた、小説という文化的創作物の副産物の癖に理にかなっていてな。現実世界のロボット工学にも多大な影響を与えている。……第一条。ロボットは人間に危害を加えてはならない。また、その危険を看過することによって、人間に危害を及ぼしてはならない。第二条。ロボットは人間にあたえられた命令に服従しなければならない。ただし、あたえられた命令が、第一条に反する場合は、この限りでない。第三条。ロボットは、前掲第一条および第二条に反するおそれのないかぎり、自己をまもらなければならない。……ネネは残念ながら、“理性”を持たないんだよ。ここが一番難しい。人間が理性を持って行動するところを、ネネはロボット工学三原則で行動理念を縛っている。ここが、今のネネと、人間を絶望的に隔てているポイントだ」

飛鳥は思考した。今の和飛の言葉を整理し、しかし、その言葉をすんなり飲み込めなかった。あんなに人間としか見えないのに、と。

「理性、の定義がよくわからない」

「私の言う理性、は、“自分のために思考する力”の事だ。例えば飛鳥。お前はなぜ人を殺さない？」

突発すぎる和飛の言葉に。飛鳥は軽く挙動不審になりながら、答える。

「そ、そりゃあ、警察に捕まるから……。それにそんな、殺したいほど憎い人もいないし……」

「そう。警察に捕まりたくないから、人を殺さない。自分のために思考する、つまり理性を持っているから、人を殺さない。じゃあ殺した場合は？　これも人間ならば理性となり得る。憎い人間がいる。あー、この人いなくなれば愉快なのにー。そうだ殺そう。……どう

だ、自分のために思考している。……普通なら、警察に捕まるリスクの方が上回って殺すには至らないものだがな。ネネは、その部分は、ロボット工学三原則で縛っている。だから人を殺さない。傷つけない。もちろん、日常生活における行動も、縛っている。ネネは、自分のために行動したことがあるか？」

言われ。この二週間の生活を思い出し。一つの結論に至った。

「……無い」

そう。絶望的なまでに、無いのだ。

ご飯を作るのは飛鳥が食べるから。洗濯をするのは飛鳥が着る服を綺麗にするため。学校に行くのは和飛のデータ取りのため。本当ならば勉強なんてする必要もないのに。夜、飛鳥がパソコンに向かったら、邪魔をしないように自分の電源を切って布団の上で横たわる。本当は寝る必要もないのだが。

「だろう？　ロボット工学三原則に基づいた思考はする。しかしそれは到底理性なんて言えない。ネネは、理性を持たない」

台所の方からの、ネネが動き回る音が、妙に大きく聞こえる。甘い、お菓子の焼けるいい匂いが漂ってきた。どうやらホットケーキのようだ。

「勿論。ネネの思考は成長する。起動したときから、経験に基づいた成長を行う。開発者である私ですら、ネネの思考がどのように成長するか未知数なのだ。だから、その未知数の部分に私は期待している。未知数の部分に、理性、それに準ずるものが生まれないか、とね。それが生まれ、ロボット工学三原則が破られたとき、ネネは完成に一歩近づくわけだ」

語る和飛の瞳は、いつしか、少年のように輝いていた。小学生がサッカー選手になりたいと言っているような、純粋に夢見ている瞳。しかし、その瞳に孕む得体の知れない狂気を、飛鳥は感じた。

「できたよーう！」

場違いなほど明るい、ホットケーキを三枚乗せた大皿と、小皿数枚を持ったネネの声が、ひどく無機質なものに聞こえた。

ロボット少女がいる日常（１０）

ついでに校長に挨拶してくる、と、和飛は翠龍学園へと出向いて行った。かつては和飛も、翠龍学園の生徒で、現校長は和飛の恩師であったという。そしてもっと言うと、和飛は美少女研究会の第二代部長であったというが、飛鳥的にはとてもどうでもいいことだ。

今回の起動実験も、校長には了承を取って行っているらしい。

人間らしい理性が芽生えるか否か、という実験を行うには、学校という社会の縮図と言うべきコミュニティはうってつけである。

そして、翠龍学園に溢れる変態は、ネネというイレギュラーな存在を一般化するためには、絶好の隠れ蓑。そして兄という設定の飛鳥の存在が、そのリアリティーを増大させる。

実は飛鳥を翠龍学園に入れたこと自体、ネネの実験を想定していた、と言っても十分に納得がいく。飛鳥的には、少しだけ不満であった。息子を一人立ちさせる、とかいう大仰な理由を当時は言っていたが怪しいものだ。

今飛鳥は、暇そうに卓袱台に頬杖をついて夕方の報道番組を見ていた。ネネはというと、イレギュラーに人数が増えた夕食の準備中であった。

家事全般の役目をネネに取られてしまって、このように暇していると本当にこれでいいのかと思う飛鳥であるが、下手に手を出したら逆にネネに迷惑がかかってしまうという、出来のいいお母さんとダメなお父さんという構図になってしまっていた。お料理の出来る男子高校生という自分のアイデンティティを完膚なまでに潰されて大変不服である。

もっと生産的なことをしなくては。ちょっとだけ一念発起してパソコンに向かおうとする。いくらでもやることはある。趣味で作成したフリーソフトの改良とか。そろそろ受験勉強も視野に入れないといけないのだが、それは本能的にシャットアウトである。

テレビを消して、立ち上がる。
と、その時。はかったかのように、インターホンが鳴った。和飛が帰ってきたにしては早すぎる。ネットで何か買ったような記憶もない。
居間へ入ってくるドアの横の壁に引っかかっている電話の受話器を取った。
「はい？」
「あ、飛鳥ぁ？　あけて頂戴よぉ」
受話器の奥から、妙にスローペースで間延びした女性の声が聞こえた。高校に入ってからは週一くらいでしか聞いたことが無い、今の飛鳥にとっては救いの神の声だ。
飛鳥は小さくガッツポーズをした。こんなにも早く動いてくれるとは。
「分かった。ちょっと待ってて」
早速玄関に向かい、サムターンを回して鍵を開け、ドアを開けた。
そこにいたのは、飛鳥より僅かに身の丈が低い女性。艶々した黒髪を腰まで伸ばし、その身に包むのは、このご時世では場違い甚だしい、淡い青色の和服。典型的な和風美人と言って差し支えない。
歳は三十前くらいに見え、非常にノンビリした感じの笑顔をその表情にたたえている。
「久しぶりぃ、飛鳥ぁ」
「あ、うん。久しぶり。上がってよ、母さん」
飛鳥の母親、孔雀蓮椎葉。姉ですと言っても十分に通用、いや、そうとしか見えないほど若々しい外見をしているが、飛鳥自身もこの人が何歳なのか知らない。
「ごめんねぇ。和飛さんが迷惑掛けてるでしょぉ？」
和服姿によく似合う、高級そうな漆塗りの下駄を脱ぎながら、椎葉が少し呆れたように言う。
「そりゃあもう。父さん今いないけど、しばらくしたら帰ってくるはず。やー、助かった。母さんがいたら百人力だって」

「帰ってきたらたっぷりお灸すえてあげなくちゃねぇ」
うふふふふ、と黒い笑い声を上げながら、飛鳥の部屋に上がりこんでいく。
死んだな、と、これから繰り広げられるであろう虐殺劇を思う飛鳥であるが、完全に和飛の自業自得であるから、同情する余地は無い。
と。その声を聞いてか、ネネが台所から出てきた。そして、元気よくお辞儀した。
「こんにちわ、椎葉さん！」
「こらぁー、お母さんって言ってって言ってるでしょー？」
「え、えへへ、ごめんなさい、お母さん」
その辺の密約は、飛鳥は知らない。実家の方で起動したときにコミュニケーションを取っていたのだろう。椎葉の態度も、本物の娘に接するかのように自然である。
「お料理してるの？」
「はいっ！　お母さんも食べていってください！」
「あらー。じゃあお邪魔するわねぇー？　手伝うことあるー？」
「奥で待っててください！　すぐ作りますから！」
そう言い残して台所に引っ込むネネを見送り、椎葉と飛鳥は居間へと向かった。
「あらあら、すごく綺麗に片付いてるのねぇ。ちっとも男子高校生らしくないわぁ」
元々飛鳥もあまり散らかっているのが好きではないし、ネネが来てから徹底的に掃除するものだから、汚し辛いというものだ。
「エッチな本とか無いのかしら？」
「無いよ！？　自分の息子をどんな目で見てるんだ！？」
和飛同様やっぱりどこかズれているのは、しょうがないことなのだろう。そもそも和飛と結婚している時点で浮世離れすらしている。
「懐かしいわねぇ。飛鳥ったら、どこで拾ってきたのか分からないエッチな本をベッドの下に」

「わーわーわーわー！　一体いつの話だ！」
まだパソコンなども持っていなかったピュアな少年が、男子小学生の幼いリビドーをぶつけるために拾ってきた雑誌が、あろうことか部屋の掃除に入った母親に見つかるという、男子小学生の過ちを突然回想されて狼狽する飛鳥である。
しかもあの時、怒られるならまだしも、からかわれるという、ある意味ダメージが一番大きい攻撃をされた飛鳥の精神ダメージは計り知れないものであり、飛鳥のトラウマを抉り返されてしまった。
しかしあの時、そんな椎葉に対し、和飛は血の涙を流さんとする勢いで責めた。
『飛鳥が！　飛鳥が、どれだけの思いをもってしてこれをもって帰ってきたか！　お前に分かるか！　分からんだろう！　分からんでもいい！　むしろ男にしか分からん！　しかし！　しかしだ！　これだけは覚えておけ！　こういうものは！　見つけてもそっと元の場所に置いておくものだ！　そして何事も無かったかのように接してあげるのが母親の優しさというもの！　そして影ながらに息子の成長を喜ぶのが母親の愛情と言うものだ！　それが出来ないお前は母親失格！』
そして翌日、これを使え、と、ポーンとパソコンを買い与えてくれた時が、この十数年間の人生で唯一和飛を尊敬してしまった時だった。
「あらぁ？　やっぱり“ぱそこん”の中なのかしらぁー？」
「残念ながら入ってないよ」
そんなわけで、今の飛鳥の部屋はこうして母親に漁られてもやましいものは見つからない。しかし、そもそもネネもいるからパソコンの中にすらやましいものを入れることはままならない点が、飛鳥の悩みでもあった。
「お茶お茶―」
と。ネネが電気ポットと急須とお茶葉を持って部屋に入ってきて、そんな話題はうやむやになった。

ロボット少女がいる日常（１１）

マンションの廊下を、和飛は多少フラフラと覚束ない足取りで歩いていた。
久々に会った恩師である翠龍学園校長と繁華街に飲みに行った帰りである。
もうそろそろ日付が変わろうという時間であるが、和飛は迷わず飛鳥の部屋へと向かっている。相変わらずの家主の迷惑など考えてなどいない。
強制的に徴収した合鍵で鍵を開けてドアに入る。
「あらあら。お帰りなさい和飛さぁん。ご飯にするぅ？　お風呂にするぅ？　それとも、あ、た、しぃ？」
「……椎葉にするよ、マイハニー」
部屋の奥から出てきてそう言った椎葉を見て、和飛はちょっとだけ顔をにやつかせながら椎葉に手を伸ばした。瞬間、その表情が鮮烈なまでの苦痛に染まる。
「イタタタタタ！　ギブギブギブ！」
その手を強く握り捻り上げ、あっという間に一飛を行動不能にしてしまう椎葉。鮮やか過ぎる手つきである。
どうやらかなり慣れているようだが、それは当然と言えば当然だろうか。常々、暴走する一飛を椎葉が笑顔で締め上げるのを、飛鳥は幼いころから見ていたりする。
「何がマイハニーですかっ！　あんなにテレビの中の女の子とばっかり遊んで！　しかも、何ですか、あのベッドの上に置いてあった水着を脱ぎかけている女の子の絵が描いてある抱き枕は！　いつの間にあんなものを買ったんですか！　あんなものを抱くぐらいなら私を抱いてくれたっていいじゃないですか！」
「そ、その発言はまずい！　情操教育的にまずいぞおおお！　う、腕がああああ！」

「私は見ましたよ！　一飛さんが、四つんばいになっている女の子のお人形のおまたの部分を指で撫で擦っているのを！　実物が身近にあるのに何が不満なのですか！」
「だ、だから、そんな発言は慎みたまえ！　君は淑女としての恥じらいと言うものが足らん！」
「アナタに指摘される筋合いは全くありません！」
正論である。どこまでも、椎葉の主張は正論である。和飛に恥じらいを持てと言われるということは、泥棒に泥棒はいけない行為だと説教されるのと同じことである。
「う、うおおおおあああアッー！」

玄関先で行われているご近所迷惑極まりない壮絶な夫婦喧嘩をよそ目に、飛鳥はネネとテレビを見ながら夜の安らぎの時間を過ごしていた。家主は自分なのだから、近隣住民にあまり白い目で見られるようなことはしてほしくない。
「この芸人、いつまでもつと思う？」
「この手の人は子供にしかウケないからね。多分キメ台詞が流行語大賞にノミネートされちゃうだろうから、そうなってくると過去のデータを参照しても、結構高い確率で来年の今頃は干されてるだろうね」
言って、ネネは卓袱台の上のビスケットを一つかじった。どこの評論家だと言わんばかりの意見である。
その時、居間のドアが開いて、一度外れて入れられた腕をクルクル回しながら、痣だらけの顔の和飛が出現した。その後ろに、一通り文句を言って暴力に働きかけたらスッキリしたのか、晴れやかな笑みを浮かべた椎葉がついて入ってくる。
飛鳥がジトーッと和飛の事を見ていると、和飛はさもバツの悪そうな表情をして後頭部を掻いた。
「その……なんだ」
言って、ヒビが入ったメガネをクイッと人差し指で正した。

「何事も、ほどほどにな」
と、諭すように呟いた。何事もほどほどにすることが出来なかった男が言うのだから、正しいのだろう。
「大丈夫。僕は父さんみたいにならないよ」
和飛の反面教師としての才能を再確認した飛鳥であった。

ロボット少女がいる日常（１２）

あれだけ壮絶な喧嘩をしていたのに、椎葉と和飛は日付が変わったくらいの時間なのに外へ出て行ってしまった。和飛の車がどこかに止めてあって、それを使って家に帰ったのか、はたまた夜の街に消えていったのか。

飛鳥的には、どうでもよかった。可能性としては五分五分であるからして考えるだけ無駄である。

時々椎葉が爆発するだけで、普段の二人は仲が大変よろしいと言える。息子としては喜ばしいことだ。数ヵ月後に家族が増えるような展開があったとしても、それも大変喜ばしいことであろう。

そんなわけで、部屋の中には結局ネネと飛鳥の二人だけとなった。交代でお風呂に入って、フローリングの上に布団を二つ並べて敷き、飛鳥がパソコンに向かうと、ネネは布団に横たわった。

ネネは、飛鳥に背を向けて横になり、肩まで毛布をかけていた。本当は毛布などもいらないのだが、自分だけ毛布を使ってネネが毛布を使わないという光景を想像して大変シュールであると思った飛鳥が、使うように勧めたのだ。

ネネの寝息が微かに聞こえる。ネネの呼吸は、内部構造の冷却、排熱のために行われる。今は動作を最低限に抑えてエネルギー消費を抑えている故に、その寝息は非常にゆっくりとしたものである。

パソコンに向かい、キーボードを叩く。公開しているソフトの、ユーザからのバグ報告に基づくアップデートの最中であった。

しかし、十分ほどで面倒になった飛鳥は、変更を保存してエディタを閉じてしまった。

今日はイレギュラーな両親の訪問もあって、非常に騒がしかったこの部屋も、こうなってしまうと、少しだけ孤独を感じてしまう。まるで祭りの後の静けさ。本当は、心の中では両親と離れて暮らすのが寂しかったのかもしれない。

それに、今の唯一の同居人であるネネが、和飛の言葉のせいで少しだけ無機質なものに感じるようになってしまったのも一因であろう。

結局自分は一人なんだ、と若干中学二年生病のような精神状態になっていた。

ため息をひとつついて、パソコンを休止状態にした。今日はもう寝てしまおう。よくよく考えたら睡眠時間が明らかに足りていないことに気づく。

パソコンスペースの座椅子から、布団の方へと移動。

天井に取り付けられた照明を、枕元の卓袱台の上のリモコンを操作してオレンジ色の豆球に変える。

そして、毛布の中に体を滑り込ませるときに、ふっと、ネネの方を見た。

飛鳥に背中を向けて眠るネネ。お風呂に入るまでは左右二つに纏めていた赤い茶髪は解かれて、肩のあたりで布団の上に散らばっている。うなじのラインとかがすごく生々しい。何度も思うが、本当にロボットかどうか、信用ならん時が多々あった。

しかし、未完成だという和飛の言葉が、喉に刺さった小骨のように引っ掛かる。こんなに人間なのに、人間じゃないという悲劇が突き刺さってくる。

しかし。考えても仕方がないことだった。飛鳥には、ネネの構造なんてまるで理解できない。技術的なものには、何も手出しは出来いない。

結局は、兄として一緒に暮らすことしかしてあげられないことが、ただただもどかしい。

バフッと。身を投げるようにして布団に倒れこんで、毛布をかぶった。

前日の睡眠時間三時間で現在時刻午前一時の破壊力はすさまじかった。明日もネネに押しつぶされるのかとか思いながら、泥沼に沈むように眠りについた。

幕間（1）

少年の家に超絶な美貌を持つ少女が、一人、ないしは複数、ある時は親の事情により、またある時は悪の組織に追われて命かながらに、更にまたある時は何の理由もなしに転がり込んできて、少年のことをよってたかって大好きになってしまう、という、男ならば一度は想像するであろう、夢のような事象がある。

これは、漫画やアニメやゲーム等の二次元世界で多々使用されてきた、その物語の著者の妄想と欲望を顕現化＼させた、空想の産物である。

他にも、布団を引っぺがして起こしてくれる、お隣に住んでいる幼馴染や、懐いてくるその妹。とっても勝気な少女との曲がり角でぶつかる出会い。血の繋がらない妹との危ない恋。等、挙げてみれば切りが無いが、現実世界で起こることはあるか、という質問をされると、そんな質問はナンセンスだ、と答える。そんなことが起こる確率など、限りなくゼロに近い。

両親が海外に出張した？　家出してきた？　許嫁？　悪の組織『ブラックモエモエ団』から逃げてきた？　机の引き出しから出てきた？

そんな非日常的なコト、起こると思うほうがおかしい。きっとあなたは頭が狂っている。幼い少女に対する犯罪を起こす前に、さっさと病院にいって適切な治療を受ける施設に入りましょうね。

そう信じて止まなかった孔雀蓮飛鳥の信念と平穏無事で無風状態の日常は、あの日、木っ端微塵に砕け散り、巻き起こった暴風に乗ってあっという間に霧散してしまったわけであって。

飛鳥は自称我慢強い人間である。父親がこの世のものとは思えないくらい美少女オタクでロリコンという極めて残念なことになっている時点で、生まれた瞬間、いや、生まれる前からある意味理不尽

を強いられてきたと言っていい。入学した高校が、周辺住民に恐れられる変態の巣窟であると入学した後に知った時とかも、目立たなければ問題ない、と柔軟に対応したものだ。だからこそ、多少の理不尽は我慢することが出来た。

しかし。今回彼を襲った理不尽は、飛鳥の想定をはるかに超えた。

黒い猫が描いてあるトラックで配送を行う黄緑色の使者から受け取った、父親から届いたトランク。それを開けたら、何か白っぽい肌色の物体がミッシリと詰め込まれていました。だけどよくよく見ると、それは裸の幼女でした。以上、誰も思いもしない人生最大の超絶理不尽。

飛鳥は、非常に反応に困ってしまった。こういう場合、どう反応すればいいのだろう。あんまりな理不尽さに思考が停止してしまっている。

少女の外見は九歳くらい。当然のごとく一糸纏っておらず、凹凸がほとんど無い白い裸身を曝け出している。まるで神様が自らの欲望を枯れ果てるまで注ぎ込んで作られたかのように可愛い顔をしており、幼女嗜好者でなくても変な気を起こしてしまいかねないくらいである。

少女は、開いたトランクの中に崩した正座で座って、間の抜けた表情をしている飛鳥の顔を、ルビーのような瞳で「穴が開け！　ええーい！」という感じに見つめてくる。

やがて少女が口を開いた。

「照合中」

その、ちまっとしていて思わず触りたくなるような唇の間から、声変わりする気配なんて微塵も無いほど甲高いが、全く強弱が無い、まるでコンピュータで作ったような発音が飛び出した。

「照合完了。９８．２６５８パーセント一致。孔雀連飛鳥本人と断定」

そうだ。このトランクの差出人に確認を取れば良いだけの話じゃないか。

そう思い立ち、ピクリとも動かない少女をとりあえず放置しておいてテーブルに駆け寄り、携帯電話を取った。
そして、このトランクの差出人である、飛鳥の父親、孔雀蓮和飛をアドレス帳から呼び出す。
飛鳥は今までの理不尽の原因が全てこの男に集約していると考えており、正直苦手な人物であったが、こんな破天荒な事をやらかして黙ってはおけない。
数回のコールの後、繋がった。
『はい』
「もしもし、父さん？」
『お、飛鳥。お前から連絡してくるなんて珍しいじゃないか。一体どうした』
電話の向こうで父親がそ知らぬ顔をしているのが目に浮かぶ。よくもまあぬけぬけと自分は無関係です的な声が出せるものだ。
「どうしたじゃないよ。とりあえず、アナタサマが送ってきたトランクについて聞きたい。あの幼女は何だ」
『……やったね飛鳥。家族が増えるよ！』
携帯電話の向こう側にいる、遠く離れた実家の父親、和飛の声。
そして、それを聞いて額に手を当て、飛鳥はどうしようもないほど悩んでしまった。
『どうした。嬉しくないのか。妹という設定だぞ。世界は妹を中心に回っている。第二次世界大戦も某国の皇太子の妹を巡って大国が戦ったんだぞかっこ嘘。はにゃーんはぁはぁだ。分かるか』
「分かるわけないだろうがーっ！　何処の世界に宅配便で全裸の妹を郵送する奴がいるんだーっ！」
字面だけ見ると犯罪臭しかしない台詞を吐きながら激昂する飛鳥。
普段はあまり自分からしゃべることは無い根暗な少年な飛鳥だが、父親たる和飛に対してはこんなテンションになってしまうのは親子の宿命だろうか。飛鳥が幼いころから培われてきた、頭のおかしい和飛へのツッコミ根性故。

『おお、息子よ。妹に萌えないとは情けない。それでも私の息子か。まさか姉萌えなのか？　確かにお前は私と椎葉の第一子であるが故に姉を与えることはできなかったが、姉などという糞ビッチ属性へ倒錯的な愛情を向けるのはどうかと思うぞ。私は認めん！』
「別に姉萌えでも妹萌えでもない！　ともかく何だこの子は！　隠し子か！」
　テレビ電話でも無い故にこちらの動きは向こうに伝わらないことは分かっているが、飛鳥は後ろの幼女を指さしながら叫ばざるを得なかった。
『妹という設定だ』
「何ださっきから設定って！　そんなぽいぽいと血縁関係を変えてたまるか！　それとも何か、イメクラ的なあれなのかーっ！」
『うーむ。確かにそういう用途でも使えるか……。セールスポイントの一つとしておくか……』
　飛鳥の言葉に、電話の向こうにいる和飛は、その考えは無かったと言わんばかりに感慨深げにしている。
　飛鳥は、本気で心配になってしまった。今現在でも犯罪の匂いしかしないのに、それが一層強くなってしまった形である。人身売買がうんたらかんたら。エロ漫画だけだと思っていた裏の世界の片鱗のようなものを感じてしまう。
「「いつかやると思っていました」と言っておくよ」
『おいおい、何か勘違いしていないか。その子はロボットだ、ロボット』
「ロボットぉ！？」
『そう。ロボット。厳密に言うと、人間の形をしたコンピュータ、人型情報端末』
　信じられなかった。飛鳥は、後ろの幼女に振り向き、改めてその姿を見、そして全く隠れていない大事な部分とかに目が行ってしまった慌ててまた背を向ける。
　自らの常識を粉々に打ち砕く存在。それは幽霊だとかそういう類

の存在に近く、それをハイハイと許容することは到底出来なかった。
「こんな生々しいロボットがいるわけ……！」
『おいおい。ロボットじゃなったらトランクで輸送する途中で窒息するだろう常識的に考えて』
しかし、和飛の最も過ぎる反論に、飛鳥は閉口するしかなかった。確かに、今ネネが座っている開いたトランクの中には、生命維持装置やましてや空気穴のようなものは見当たらない。つまり、ここに来るまで呼吸をしていなかったというわけで。
『ちなみに起動後に呼吸を止めたら排熱が出来なくなってオーバーヒート、システム強制終了してしまうから注意』
その和飛の言葉を、飛鳥は噛み締めるようにしながら聞いていたが、一つの疑問にぶち当たった。
「なんで僕のところに送ってきたのさ」
その存在を認めたとする。認めたとして、何故自分のところに配送してくるのか。
『……起動実験。いかに人型情報端末と言う存在が社会に溶け込めるか、を確認するための』
しかし飛鳥はそう言われても乗り気になれなかった。せっかく一人暮らしで気軽な生活を満喫していたのに、この幼女の存在によってその生活を台風のごとく乱されてしまうことは推測に容易い。
「だったら、そっちでやればいいだろ。いくら研究所が山の中にあると言っても社会との交流が無いわけじゃ」
『研究補助金として毎月二十万支払おう』
「分かった。引き受けよう。僕に任せろ」
今現在一人暮らしで仕送り三万。この家は飛鳥が近くの高校に通うために親が買い与えたマンションの一室故に家賃は無い。食費や光熱費を支払ってある程度の余るが、パソコンという飛鳥の趣味を充実させるには如何せん苦しい。
それが一挙二十万だ。同居人が一人増えても明らかに毎月十万以上の余剰が発生することは明白。それだけの金があればパソコンの

グレードアップも、それによって発生する光熱費の増加にも余裕で対応が出来るではないか。

そんな下心なんか飛鳥の純粋無垢な心にあるわけもなく、飛鳥はただ純粋に家族が増えることへの悦びにうち震え、何の迷いも無く和飛の依頼を快諾したわけである。

これが、二週間前のこと。飛鳥とネネの、上っ面は兄妹二人暮らしの、奇妙な共同生活の始まりであった。

ロボット少女がいる非日常（1）

翠龍学園には美少女研究会という部活動が存在する。世に存在する美少女を“遠くから見守ったり”することが主な活動であるという。

しかし、普通ならばそんなもの部活動として許されることではないはず。しかし、翠龍学園ではさも当然のごとく存在しているばかりか、全部活動中最大勢力を誇るという異常事態すら起こっている。

曽我部永輝は、そんな美少女研究会部員７５名を束ねる部長を務めていた。

日本人離れした整った容姿にスラッとしたモデル体型。どの教科もソツなくこなし、スポーツ万能で運動系部活から助っ人を頼まれることもあるらしい。

そんな万能戦士な彼を悩ましているのは、部内の派閥に関することである。

こんなに人数がいれば、当然細かく派閥が分かれてしまう。大別して漫画やアニメやゲームに登場する美少女を愛でる二次元派と、現実世界の可愛い女の子を追い求める三次元派に分かれており、度々論争が巻き起こる。

しかし、二次元派は不健康ではあるが誰にも迷惑をかけない故に問題も全く起こさない。問題は三次元派である。悪質なのが、“遠くから見守る”という美少女研究会の行動理念を理解しない、三次元過激派の存在である。過激派は具体的にアプローチを仕掛けたりだとかの行動に出ることが日常茶飯事なのだ。迷惑を被っている子も多々いるらしく、目下、永輝の悩みの種であった。

放課後。部活に出るため、教室を出た永輝が、五階の教室を丸ま一つ利用した部室に行くために、階段へと向かった。

ここまで大きな部活になると、学校の経営等にも影響を与えてしまう。生徒会との連携も必要。部長がすべき仕事は尽きないのだ。

最近はゆっくりと美少女観賞も出来ないから困ったものだ、と、三次元穏健派の彼は思う。
ふと見ると、階段の方からやけに目立つ赤に近い茶髪の少女が出てきて、こちらへ駆けてきた。おそらくは、永輝のクラスメイトを迎えに来たのであろう。
かわいらしくピョコピョコ跳ねるツインテールや、元気有り余って中が見えてしまいそうになってしまいそうな危ういスカートの波打ちにハラハラしながら、しかしそんな下心全く顔に見せずに、すれ違うまでしばしその女の子を観賞した。
「ふう、やれやれ。過激派の奴らの気持ちも分からんでもないね」
ひと月ほど前に突然一年生のクラスに転入してきた、人間離れした美貌を持つ少女。しかし彼女は、そのことなど歯牙にもかけない、謙虚で思いやり満点な性格を持っていた。外見でまず美少女研究会（二次元派含め）は多大な衝撃を受け、一年生部員の報告によって内面の美しさも判明するというダブルパンチによって部員たちは彼女に夢中になり、一時期統制が全く取れない状態に陥ったのである。これを“孔雀蓮ネネの乱”というらしい。
しかし、美少女は自然体が一番だと思う彼は、決して話しかけたりはしない。兄を想う妹の図。素晴らしいではないか。彼女こそ萌えの究極体であろう。
ひと月経ってだいぶ熱も収まったかのように思われるが、一部、特に過激派では未だに危ないことが考えられているらしい。永輝は過激派に対する監視を強化し、校長に進言して、彼女に手を出したら処罰、という異例の処置を取らせた故に、今のところ危ういところであるが平穏が保たれている状態である。
しばらく彼女こと、孔雀蓮ネネの小さな後ろ姿を見送った後、永輝はため息をついて階段を上りはじめた。
孔雀蓮飛鳥が妬ましくない、と言えば嘘になる程度は、彼が羨ましかった。穏健派の中の穏健派の彼がこんな感情になるほど、孔雀蓮ネネが美少女研究会に与えた衝撃は、凄まじいものであった。

ロボット少女がいる非日常（2）

「どうだ？　今日のネネたんは？」
「今日も相変わらずの愛らしさです……」
「ああ、畜生……あのネネたんが孔雀蓮などという根暗野郎の妹だなんて……」
「そうだな。神は何て残酷なことをするのか。あんな奴にあんな愛らしい妹を授けるなどと……」
「美少女は皆で共有すべきだ！　独り占めすべきではない！」
「そうだ！　美少女は皆で愛でてこそ美少女たらしめる！」
「お兄ちゃんは妹を皆に解放するべし！」
「お兄ちゃんに死を！」
「「「「「全てのお兄ちゃんに死を！」」」」」

「四柳さんって、いっつも本読んでるイメージあるけど、どんな本読んでるの？」
　それは、単なる気まぐれだったのかもしれないし、飛鳥が瑠璃と接点を持ちたいと思ったからなのかもしれない。少なくとも、飛鳥はこの少女とほとんど会話したことが無いのだ。
　弁当を食べている時も常に黙りこくっている瑠璃が、急に話を振られて慌てている姿は、何となく可愛らしかった。
「えっ！？　あの、その、えっと……い、いろんなものを、読みます……小説、とか、詩集、とか……」
「瑠璃は雑食なんだよな。ふっつーのハードカバーや何の変哲も無い文庫読んでるかと思ったらなんか萌え萌えしいのとか、裸の男が抱き合ってるやつとか読んでるしな」

「ちょ、つ、月代……！」
月代の物言いに、瑠璃は酷く焦った様子で立ち上がって抗議するが、月代は何で恥ずかしがっているのか分からない様子である。
「別にいいんじゃないのかな」
当の飛鳥も特別馬鹿にするような様子ではない。というよりも飛鳥自身、人にはあまり言えない趣味も持っているわけで、インターネットの世界に目を向けてみると、もっとどうしようもない趣味を持っている人なんていくらでも見受けられる。
瑠璃のそれは、趣味としては別に一般的だというのが飛鳥の見解である。
「何か面白い本あったら教えてよ。小説とか、アマチュアがネットに上げてるようなのしか読んだこと無いからさ」
何となしにそう言う飛鳥だが、それがある意味フラグになっていることに、鈍感な彼は気づいていない。
「は、はい……」
瑠璃は、そのまま真っ赤になって縮こまってしまった。俯き、切りそろえられた前髪の隙間から見える大きな丸メガネの奥にある黒目がちな瞳を羞恥に濡らしているのがなんというかグッと来てしまう。嗜虐心を煽られると言えばいいか。
いかんいかん、と発生してしまった変な欲望を追い払うように首を振る。
「おいおい、ウチを差し置いて瑠璃と仲良くしようと思うなよ」
と、月代がニヤニヤとした笑みを浮かべて飛鳥を牽制した。しかし、それは別に脅しているわけではなく、明らかに茶化しているのが分かる。
「う、うるせーよ」
それを飛鳥も感じ取ったのか、少し拗ねたようにそう言って、そっぽを向いた。そして瑠璃も、月代の意図を汲み取り、俯いて小さくなってしまっている。
「ま、瑠璃泣かしたら本気でウチが殺すけどな」

そういう月代の目は、笑っていなかった。口元では笑っていて、おどけるような口調であるが、正真正銘、先ほどのものとは明らかに性質が違う、本気の目だ。
「……な、なんだよ？」
その目に射抜かれて、ちょっとだけ寒気を感じてしまった飛鳥が虚勢を張ってみると、次の瞬間には月代の様子は元通りになっていた。
「行こうぜー、瑠璃」
「あ、うん。待ってよ」
弁当箱を片付け、そそくさと立ち上がる月代と、それを受けてあわてて立ち上がる瑠璃。そして、島を作るために移動させていた机を直して、立ち去ってしまった。
本当にペットみたいだなと思っていると、視線を感じて、その方向を見ると、島を解除されたことによって飛鳥と離れたところに変な方向を向いて座っている詠輝が、無表情で飛鳥を見ていた。
「……なんだよ、曽我部？」
「いやー、飛鳥ちゃんも罪な男だなーと思ってなー」
意味深な台詞を残し、詠輝も立ち上がるのであった。

ロボット少女がいる非日常（3）

放課後。ネネは周りの友達に挨拶をしながら一足先に一年生の教室を出た。

ネネの担任は淡白な人間であった。必要なことを言ったらそれでおしまい、という。それ故、他のクラスよりもホームルームが短い。

以前はネネが外で飛鳥が出てくるのを待っていたが、一か月もたてば飛鳥の教室の場所が分かるというもの。今ではネネが飛鳥を迎えに行くことが常であった。

ネネがいる一年生の教室と特別が入っている校舎から、渡り廊下を使って二年生と三年生の校舎へ。

渡って少ししたところに、飛鳥の教室があった。

ネネが教室に来た時、丁度ホームルームが終わったらしい。教室から生徒が出てきていた。その中に飛鳥の姿はない。

後ろのドアから中を覗き込むと、席の所に飛鳥の姿があった。

だがしかし、ネネは反射的にドアの陰に体を隠した。隙間から、中を覗き込む。教室から出てくる生徒が怪訝そうな目で見てくるが、知ったことではない。

飛鳥と一人の女子生徒が、何やら話をしていたのだ。

飛鳥に一冊の文庫本を手渡している女子生徒に対し、飛鳥は何やらネネに対してもあまり見せない笑顔で本を受け取りながら会話しているのが見えた。女子生徒の方が、しきりにペコペコお辞儀しているのが見える。

邪魔してはいけないのかも、とネネは推測する。これがいわゆるいい空気というやつなのかもしれない。

「ネネちゃんなにやってんの？」

ネネの存在に気付いたのは、月代であった。丁度前の扉から出てきて、明らかに不審者なネネを見つけたらしい。

「あっ。月代さん。こんにちわ」

「おう、こんにちわ。飛鳥ならちょっと待ってろよ。今瑠璃が飛鳥にアタックかましてるところだからさ」
キシシ、と悪戯っぽい笑い声を上げながら、月代は言う。
「それ、当事者の妹に言っていいことなんですか？」
ネネはちょっと呆れた風にため息をつきながら言った。なるほど、月代はちょっと口が軽いらしい。もしくはネネが口が堅いと信頼してくれているのか。
「応援してやってくれよ。将来お義姉さんになるかもしれないんだぞー。私先に帰ってるわ。ていうか、今日スーパーでタイムサービスやる日だから一緒にどう？」
ポンポン、とネネの頭を撫でるように叩いて、月代はネネに提案した。貧乏子だくさんな月代の家では、月代も家事を担う一員なのであった。時々飛鳥のほかに月代とも学校帰りにスーパーに行ったりしている。
「あ、えーっと、はい、ご一緒します」
教室の中を一瞥して。まだ話をしている飛鳥と瑠璃の姿を確認した後、月代について歩いて行った。後で飛鳥にメールをしておこう。
先に帰ってるね、と。

ロボット少女がいる非日常（4）

「ただいまぁー？」
今日の夜と明日の朝食、お弁当くらいの分量の食材が入ったエコバッグ片手に、ネネが帰宅する。
見ると、玄関には既に飛鳥の靴が置いてあり、居間に向かうと、パソコンのところに座って棒状のアイスを咥えた飛鳥が振り返った。
「おかえり。悪いな」
「構いませんよーだ」
と。ネネはわざと少しむくれながら、エコバッグを卓袱台の上に置いた。
「……楽しそうだったけど何話してたの？」
「んー。なんか本貸してもらった。弁当の時にそういうたぐいの約束したら早速」
言いつつ、飛鳥はパソコンのマウスの傍に転がしてある文庫本のページを数ページ摘まんで開いては閉じる動作をした。
「図書室の本かと思ったけど違うんだな。四柳さん、常時三冊くらい本持ち歩いてるらしいよ」
そう言って、右手のアイスを齧る。
「ふぅん。モテモテだねえ。ネネ妬けちゃう」
「何がだよ」
先ほどから妙に皮肉っぽい口調のネネを少し不審がりながら、飛鳥はアイスを最後まで齧り、傍にあるゴミ箱に棒を放り込んだ。
「べっつにー。お夕食の準備するねー」
そう言ってネネは、居間を出て行ってしまった。
飛鳥は軽く首を傾げ、まあいいか、と先ほど瑠璃に借りた本を取った。
見たところ何の変哲もない純文学小説だった。作者も、こういう本を読んだことない飛鳥でもどこかで聞いたことがある程度の有名

な作家である。
　ああは言ったものの、果たして興味が最後まで続くだろうか、と思った。小説なんて。しかも、プロが書いた本という形のもの。ネットで読むのとはわけが違う。完全に畑違いの存在であるのだ。
「いやいや、やっぱり一般教養としてだな……」
　思い直し。飛鳥はページを開いた。

「おにいちゃん！　ごはん！」
「……うん。ちょっと待って」
　一時間後。どっぷりとはまって抜け出せない飛鳥の姿があった
「冷めちゃう！」
「……先に食べてて」
「うう、おにいちゃんがダメ人間になっちゃう……」
　と、わざとらしく泣き脅してみるが、飛鳥は動いてくれなかった。一般教養として必要であろうがなんだろうが、区切りを付けれない時点でダメな人確定である。
「……」
「もー！　知らない！　おにいちゃんのバカ！」
「わかった、わかったよ、うん」
　ネネが本気で怒りだしそうな気配を出してようやく、飛鳥は重い腰を上げた。

ロボット少女がいる非日常（5）

ネネはロボットである。新陳代謝などあるわけが無いのであるが、外には出ているので砂埃などで表面は当然汚れる。だから、ロボットだからといってお風呂に入らなくてもいいというわけでは無い。

それであったらシャワー程度でも十分に事足りるが、ネネはついでに、という感じで湯船にもつかるようにしていた。

最初はシャワーだけで済ませていたが、一度興味本位で入ってみたら、なんとなく心地よい気がしたのだ。食べ物を食べて美味しい、という感覚を理解するかのごとく。

ちなみに言うと、ネネは完全防水である。余裕で海で泳いだりも出来るのだ。

お風呂は一人になれる数少ない機会であった。ネネだって思考する。そして、考え事をするのに、お風呂という小さなパーソナルスペースは打ってつけであった。

ネネはいくら表面的に人間に近くても、人間に関してネネに解せないことは沢山あった。それを考察する時間にしていた。

しかし、今日ほど解せないことは今まで無かった。しかも解せないのは、人間のことではなくて自分のことである。

「ぶくぶくぶく……」

湯船の中で膝を抱いて、お湯に口をつけて口から空気を吐き続ける。

ピチョン、ピチョン、と、茶髪の前髪から水滴が水面に落ちる音が妙に大きく聞こえる。

ありえない。自分のことは全て分かっているはず。自分の中を流れる冷却液の量や水圧だって分かるし、各機関の熱だって分かる。熱いところがあったら、指示を出して冷却液を集中させることだって出来る。

頭脳の回路を自己診断をしても、異常は見受けられない。むしろ

自己診断システムが壊れている可能性だってある。しかしそれを疑い始めたらキリが無い。自分は正常であると信じるしかない。ロボットである故に。

「うーん……」

脚を思い切り伸ばして、上半身を反らしてみた。その外見相応に平たい胸に、肋骨を模した強化プラスチック製の骨格のシルエットが浮かび上がった。体の稼動部を司っている人口筋肉が伸び、同じ姿勢をしていて固まった関節を解す。こういうところはどこまでも人間っぽいのであった。

「くふぅっ……」

一瞬止まった呼吸を再開するように大きく息を吐いた。

少しだけ、開放感のようなものを感じた、気がする。

だけど、やっぱり思考の違和感は収まらない。それは小さな違和感である。まるでプログラムの挙動自体に影響は無い程度のバグが発生したかのような、些細なもの、のような気がする。

湯船から立ち上がった。これ以上熱を自分の方に移動させるのは、保温する電力を浪費する。さっさと上がって飛鳥とバトンタッチしなくては。

小さな両手で、無駄に柔らかいマシュマロのような頬を軽く叩いて気を取り直そとした。

「……うーん」

しかし、それでも気分は晴れない。首をかしげながら、脱衣所の棚のところにおいてあるバスタオルを取った。

――何なんだろう、この心のモヤモヤは。

ロボット少女がいる非日常（6）

「買い物行かない？」
日曜日の昼下がり。トイレから居間に戻った飛鳥が、そうネネに提案する。
「ふぇ？」
掃除洗濯を終わらせて、何もすることが無くなったネネは、姿勢悪く卓袱台に顎をつけて、テレビでバラエティ番組をつまらなそうに見ていた。
そんな中、飛鳥からの提案に、ネネはキョトンとした顔で飛鳥を見た。
「お夕食の準備には早いんじゃない？」
「いや、ちょっと遠出してショッピングセンターの方にさ。本とか、服とかちょっと欲しいなーって思って」
飛鳥の言葉に、ネネはちょっとだけ思案した後、目を輝かせて、ピョンっと勢いよく立ち上がった。
「うん！　行く！」
「よしゃ」
言って、飛鳥は箪笥から外出用の服を取りだした。さすがにジャージのズボンとTシャツ姿で買い物に出るのは気が引けるというものだ。
「歯、磨いてくる！」
飛鳥が着替える間、ネネが歯を磨く。平日の朝の風景である。
サッサと着替えて、メッセンジャーバッグを背負い、玄関の所で待っていると、洗面所からネネが出てきた。ホットパンツとTシャツ。何も履いていない脚は元気に白い肌を晒している。
「行こう！」
無駄にテンションが高いネネである。飛鳥がドアを開けて玄関から出ると、置いてあったサンダルに足を突っ込んで、ネネも外に出

てくる。
鍵をかけながら、そういえば食材の買い物以外で買い物なんて行ったことないな、と今更ながらに思った。ネネの服装も、月代が小学校のころに着ていたものを頂いてきたものである。
ネネの服も買うか、と思案しながら歩き出すと、ネネが後ろから追いついてきて横に並んだ。
「えへへ、デートだね、デート」
ギュッと。飛鳥の右腕の肘のあたりに、ネネが嬉しそうに手をからませてきた。
しかし、これがデートだというなら、飛鳥は確実に犯罪者である。ネネは小学生に中学年程度にしか見えないのだ。妹にじゃれつかれる兄という絵面の方が数倍しっくりくるというものであるし、実際そういう設定であろう。
だから飛鳥は、別に振り解くことなどはしなかった。
エレベーターに乗って、一気に一階まで下りて、マンションを出た。
目的の場所は、最寄りの駅から一駅街の方に出た場所にあるのだ。
いつも学校に行く時とは反対の方向へと。
「それでね、それでね……どうしたの？」
いつものようにマシンガントークを繰り広げていたネネが、不思議そうな表情で飛鳥を見た。飛鳥が、歩きながらであるが後ろを振り返ったのだ。
「んにゃ。いつものやつだよ」
平日しか感じていなかった（というより休日はほとんど外に出ていないせいもあるが）見られている感覚が、今日に限って感じてしまった。
少し気持ち悪かったが、気にしてもしょうがない。バカバカしい、と飛鳥は肩をすくめた。

ロボット少女がいる非日常（7）

日曜日の昼。まさしく外に遊びに出るには最適な時間帯であって、ショッピングセンター内は結構な混雑を見せていた。

飛鳥は人ごみが苦手だった。人ごみが好きだなんて奇特な人はいないだろうが、輪をかけて飛鳥は苦手だった。それはやはり、休日には基本外に出ない引き籠り体質も起因している。

センター内の某大手コーヒーショップのチェーン店の空席を辛うじて見つけて、ネネと向かい合って座った飛鳥は、深く深くため息をついた。

「あー、畜生。久々に来ると疲れる……」

購入したコンピュータ技術書二冊が入った書店の手提げ袋と、若者向けな店で買った男物の服が入った、店のロゴが入ったビニール製のナップザックを投げだし、ハンカチで浮かんだ汗を拭った。

「ほんとすごい人だよね。ネネ、こんなの見たことない」

「世の中にはもっと凄い人ごみなんていくらでもあるけどね。東京の方の通勤電車とか、某漫画市場とか」

言いながら、買ったアイスコーヒーをストローでズルズル啜る。ネットで東京の画像を見て、絶対に行かないと心に誓っている飛鳥である。

しかし、飛鳥の体面に座って、フラペチーノのクリームをスプーンで美味しそうに食べているネネは、至って涼しい顔である。ロボットが疲れるのかどうかは飛鳥には判断しかねるが。

「それにしても……よかったのか？　服とか買わなくても」

先ほど、ついでにネネの服も買おう、と提案したのだが、ネネは普通にそれを拒否した。

ネネは自分のために動かない。少し前に和飛が言った言葉が、ふと過った。

「うん。別にいいよ。月代さんのお下がりでも、結構気に入ってる

し」
命令すればネネは許諾するのかもしれない。いや、おそらくは従う。ロボット工学三原則で縛られている。しかし、そこまで干渉するのは違うと思った飛鳥は、おとなしく引き下がったわけだ。
「ネネ」
「んー？」
口に入れたスプーンをくわえたまま、ネネは可愛らしく首を傾げた。
飛鳥も、一度アイスコーヒーを啜って、テーブルに置き、組んでいた脚を逆に組み直した。
「我がまま、とかさ。別に言ってもいいんだぞ？　お金だって、父さんから研究補助金で沢山もらってるしさ。ネネが来てくれたから貰えるんだ。ネネの、お金みたいなもんなんだから」
おそらく、あの和飛の言葉を否定したかったのかもしれない。こんなにも人間なのに、断片的に見え隠れするロボットらしさが、気持ち悪かった。従順なロボットで、いて欲しくなかった。
「でも、ネネ別に満足してるし……」
それはきっと、ロボットとしての言葉だ。勿論、ネネはネネという一人の存在として喋っているのかもしれないが、飛鳥には、それが酷く悲しいものに感じられる。
「……そう、か」
飛鳥は、据わっている椅子の背もたれに体重をかけ、深く腰掛け直した。
飛鳥の悲哀に、ネネは全く気付かない。また一口クリームを口に運んだスプーンを咥えたまま、不思議そうに飛鳥を見つめて、可愛らしく首を傾げた。

ロボット少女がいる非日常（8）

――全てのお兄ちゃんに死を

月曜日。三時間目の終了時。飛鳥はちょっとトイレに、と自分の席を立った。

教室を出て、階段の傍にあるトイレへと歩いていく。

教室の戸三つ分ほどの幅がある広い出入り口を抜け、すぐに二手に分かれる右の男性用の方へ。

用を足して、手を洗って。

教室に戻ろうと、男子トイレを出た瞬間。

ドッ、と。飛鳥よりも小柄で痩せ形な男子生徒が、明らかに故意に、ぶつかってきた。

「っ！？」

次の瞬間、飛鳥の腹部に痛みが走った。しかしそれも一瞬。度の過ぎた痛みは、熱さへと変わる。

「なっ、なっ！？」

慌てて飛鳥が男子生徒を強く突き飛ばすと、飛鳥の腹部から、男子生徒が右手に持ったカッターナイフが抜けて行く。その鉄色の刃と、黄色いプラスチックの持ち手が黒っぽい朱に染まっているのが見えた。

飛鳥はそれを見、自分の、熱く疼く腹部を見た。

白い夏用のシャツの腹部が、見る見るうちに赤くなるのを、酷く客観的な視線で見た。

「……え？」

余りに非常識な事態に、それが現実のものであると認識できない飛鳥は、酷く間の抜けた声を上げるしかできなかった。ただただ、脳への警告のように、腹部の熱い痛みだけが、心臓の鼓動に合わせ

て強くなったり弱くなったりしていることだけが、飛鳥が認識する現実であった。
「うおっ！？」
そこに入ってきた、柔道部にでも入っていそうな大柄な男子生徒が、驚きの声を上げた。当然である。腹部を赤く染めた飛鳥と、その場で尻もちを付いている男子生徒の手にはカッターナイフ。何が起こっているかは明白であった。
「お、お前ら何やってんだ！？」
そんな、その大柄な声に相応しい、野太い大声が、飛鳥の耳には酷く遠くに聞こえた。大柄な男子生徒が、尻もちをついている男子生徒の手を捻り上げてカッターナイフを取り上げる様を、茫然と見つめる。
「おい誰か！　先生呼んで来い！　人が刺されてるぞ！」
トイレの外へ、男子生徒が大声を上げると、休み時間故に騒がしい外の騒がしさが、別の種類の騒がしさへと変わる。
「お前！　大丈夫か！？　お前、これで刺されてるんだぞ！？」
「え？」
その男子生徒が、飛鳥へと話しかけるが、今一事態を把握できない飛鳥は、自分の腹部と、男子生徒が右手で提示しているカッターナイフを交互に見る。
そしてやがて、現実が十数秒のタイムラグを経て、飛鳥の脳へと到達する。
「それで、僕を……さ、し……」
右手を、赤く濡れたシャツの腹部に当てる。鋭い痛みが走る。熱い。痛い。その強い刺激が、飛鳥の思考を徐々に混乱させていく。
「ひ、い、あ、あああああああああああ！！！」
元々少し高めな飛鳥の声が、裏返って耳障りなまでに高い悲鳴となった。
「さぁっ！　ささ、さされた！！！　さされた！！！」
男らしくない、なんて言っている場合ではない。自分が死んでし

まうという恐怖に、飛鳥は半狂乱で悲鳴を上げまくった。
ガクッと、膝から力が抜けて飛鳥はその場に座り込んだ。
男子生徒が暴れる飛鳥をなだめすかそうとしているらしいが、それを飛鳥が認識することは出来ない。
「し、しぬ！　しぬう！」
飛鳥のその大声も相まって。騒ぎを聞きつけた野次馬が集まってきて。やがて授業を終えて職員室に帰る途中だった複数の先生がやってきて。飛鳥の意識は、そこでブツリとテレビの電源を落とすように、途切れることとなった。

ロボット少女がいる非日常（9）

飛鳥にとって、ある意味幸運だったかもしれない。人目に付く場所で、人目に付く時間に、その凶行が行われたことにより、止血処理が早めに行えたことが。

そして、犯人の男子生徒が使っていたカッターが小さく、また、男性生徒自身も非力であったことから、あまり深いところまで刃が到達しなかったことが幸いした。

救急車で運ばれた先で迅速に輸血され、腹部の傷も縫合され、飛鳥は一命を取り留めたのである。

今は、個室になっている病室で、泥の様に深く、現実世界を拒絶するように眠っていた。

妹、ということで、呼び出され、一緒に救急車に乗ったネネは、病院についてから、買い与えられていた携帯電話で、和飛に連絡した。

するとどうだろう、ものの一時間ほどで、和飛と椎葉が病院に駆け付けたのである。

曰く、研究所のヘリを使った、という。

今は、ネネは飛鳥の横で、飛鳥の左手を両手で握っている。

飛鳥を守れなかった。人型情報端末は、主人のサポートだけでなく、主人を守ることも役割だと思っていたのに。役割が遂行できないなら、自分なんていなくても、と、自分すら否定する自己嫌悪の思考に陥っていた。

まず校舎が違うのだから、ネネが飛鳥を守るなど、このケースに限っては不可能だった。無茶な話である。だが、それでも、ネネは納得できなかった。人間の思考をトレースできる凄い思考回路を積んでいても、使い物になんてならない、と。

押しつぶされそうな感覚が怖い。時折、その目の端から、涙を流しては、両手で拭う。

そして、ネネに輪をかけてイライラしているのが、和飛だった。
和飛は、病室の壁に寄り掛かって、腕を組んだ姿勢で、右手の指で左腕を、まるで貧乏ゆすりの様にタップしている。
普段息子不幸な行動ばかり取ってきた和飛も、ただの一人の親バカな父親だった。息子を極度に心配し、頭の血管が切れてしまいそうだという表現がピッタリな、強いストレスが見え隠れしている。
そして、予想通りと言えば予想通りだった。病室に入ってきた椎葉は、こんな時だというのに、その表情は酷く穏やかだ。
「死ぬようなことは無いってお医者さん言ってるんだからぁ、焦っても仕方ないでしょう？」
言いながら。ギロッと睨みつけてきた和飛を宥めすかすように、頭をポンポンと撫でた。
「ねぇ？　殺しても死なないような和飛さんの息子なのよぉ？　生命力が人一倍あることくらい、分かり切ってることじゃない。飛鳥を信用しなさいよぉ。お父さんでしょぉ？」
肝が据わっているというか、据わりすぎて地面に根を張っているんじゃないかと言っても過言ではないほど。椎葉が動揺した姿を、夫である和飛すら見たことは無かった。
「はぁ……」
組んでいた手を解いた和飛が、深いため息をついた。椎葉にはかなわないのだ。結婚した当時から分かっていたことじゃないか。和飛のストレスが、少しだけ和らいだのが見えた。椎葉に呆れてしまったと言った方が正しいのかもしれないが。
次に椎葉は、ネネの隣に、壁に立てかけてあった折り畳みいすを出して据わった。
「ネネちゃん？　ネネちゃんは、悪くないのよ？」
言いながら、ギュッと、ネネの茶色い髪に覆われた頭を抱きしめた。
「で、でも……ネネ、おにいちゃんを守るっていう役目も……」
「無理よぉ。学年が違うんだからぁ。どうにもならないことって、

たくさんあるのよぉ？　それを責めても、しょうがないの」
そうは言われても。ネネには全く納得出来なかった。罪悪感は全く消えない。
ポロポロと流れる涙が、顎を伝って、椎葉の和服の袖に零れ落ちた。
「飛鳥だって、ネネちゃんが悪いなんて絶対に言わないし、そもそも思っても無いわよぉ。だから、ね？」
しかし、それでも。ネネは、首を横に振ることしかしない。自分を否定することしか、しない。
局所解だ、と和飛は思った。ネネが悪くないことなど、和飛でも分かる。しかし、ネネは自分が悪いという事実しか認めない。誤った解が正しいと思い込んでしまっている。人工知能の学習においてはよくある事象だ。
椎葉が何を言おうが。目を覚ました飛鳥が何を言おうが。きっと、ネネは自分を責め続ける。ロボット故の頑固さ。ロボット故の、融通の利かなさ。
改良の余地在りか、と。こんな時でも考えてしまうのは、職業病であろう。
しかし。感情表現豊かにするために、涙腺をつけたのは失敗だったな、としみじみ思う。女性の涙は、苦手だった。

ロボット少女がいる非日常（１０）

「おにいちゃん！　おにいちゃん！」
甲高いネネの声が聞こえる。なんて耳障りなのだ。
妙に体が重い。目を開けるのも億劫なほどだ。
しかし、そばでネネが飛鳥の事を呼んでいる。それも結構切羽詰まったような口調で。
おかしい。朝食が出来たから起こしているにしては、焦っているような気がする。
瞼を開けると、見覚えのない部屋の光景がぼんやりと目に入ってきた。
白い。全てを拒絶するような、潔癖な白いカーテンに囲まれている。天井も、勿論白い。
しかし今は天井の電灯が付いておらず、ベッドの周囲に置かれた機械のＬＥＤと、足元の方に取り付けられた電灯が、淡い光でカーテンの中を照らしていた。
「……んー」
起き上がろうとして。
「んぎ！？」
腹部に鋭い痛みが走り。
「だめ！　起きちゃだめ！」
そうネネが言うのと同時に、起き上がろうとした飛鳥の体が無理やり押さえつけられた。何が起こっているのか、飛鳥には全く理解できない。見ると、ネネは涙をボロボロ零しながら、飛鳥の肩を持ってベッドに押さえつけていた。ネネ本来の体重も相まって、飛鳥の体は完全に起き上がれなくなった。
「ど、どうしたんだよ？」
わけがわからない。ネネはなぜこんなに狼狽しているのか。そもそもここはどこだ。

飛鳥は、泣きながら喚き散らしているネネの顔を見ながら思考したが、全く分からない。
「覚えてないの！？　おにいちゃん、刺されたんだよ！」
「ささ、れた？」
言われて、先ほど痛みが走った腹部を撫でてみて。なるほど、包帯のようなもので覆われているのが感触で分かる。
しかし。
「……ごめん、全然知らない。あれ？」
一番最近の飛鳥の記憶は。寝ている間にずいぶんと長い夢を見たせいで遥か彼方のようにも感じられるが、辿ってみると、学校の三時間目の授業から途切れていた。そこからいきなり夢の世界に入って気が付くとここにいた感じだ。
壮絶な違和感に、飛鳥は横になったまま首を傾げた。事故や事件のショックによって短期的な記憶喪失になる人もいる、という話を思い出していた。
「先生に呼ばれて！　おにいちゃんが刺されたから一緒に救急車乗ってくれって！　しっ、心配したんだからね！」
「そ、それは悪いことをしたけど……」
そもそもその記憶がないのだから、ネネがこんなに泣いていること自体、飛鳥にとっては現実感なんてない。酷く冷静な思考で、涙腺も付いてるのか、すげーな、と場にそぐわないことを考えるほどだった。
「……ごめんなさい、おにいちゃん。ネネが、守ってあげれなかったから」
涙を拭って。ネネがパイプ椅子に座りなおして、項垂れた。一体どれくらい着ているのだろう。皺くちゃになった制服のスカートから伸びる、細く白い脚。涙を両手の腕で拭った後、その膝の上に、両手を置いて、ギュゥ、と強く握りしめた。
「はぁ？」
しかし、そのネネの暴論に釈然としない飛鳥は、素っ頓狂な声を

上げることしかできない。
「ネネが、ダメダメだから……おにいちゃんを……」
「ちょ、ちょっと待て！　責任云々の話をするなら、まずどういうシチュエーションで僕が刺されたのかを聞かせて欲しいね？　僕の記憶は月曜日……というか何日たった？」
「二日だよ。現在時刻午前一時二十八分五十二秒」
秒まで伝えてくるネネに、ご丁寧にどうも、と少しおどけた口調で一言添え、続けた。
「ああ、うん、それくらいならいいや。起きたら何年も経ってましたっていう状況だったらどうしようって焦ったけど。……で、僕の記憶は、月曜日の三時間目から無い。だからどういう状況で刺されたのが分からないから。でも、三時間目に刺されたんだったら、ネネは干渉しようがないだろ。校舎が違うんだから」
「で、でもっ！　役目が遂行できないならロボットなんてあってもなくても……！」
「そもそもさっき先生に呼ばれて救急車に乗ったって言ってるけど、ネネは僕が刺されたのを後で知ったんだろ？」
「でもっ！」
「でも、じゃないよ。悪いのは刺したヤツ。誰かは知らんけども。……ただ、それだけだ。僕はネネに、盾の役割は求めてない」
諭すように。布団から、左手を出して、ネネの手に重ねる。熱の管理が上手くいっていないのだろうか。機械の様な冷たさが、飛鳥の左手に伝わってくる。その左手を、ネネは両手で握った。
「納得行ってないな？　……じゃあ、それでいい。そんな悪い子のネネにお仕置きだ。僕の願い事を一つ、聞いてくれ。それで、全部チャラだ。いい？」
飛鳥がちょっと呆れた風にそう言うと、ネネは鬼気迫る表情でパイプ椅子から立ち上がり、飛鳥の方にずずいと顔を突き出した。
「な、なに？　何でも……言って。めいれい、して？」
そんなネネに飛鳥はちょっと引き気味に笑いながら、告げる。

「ご飯、もうちょっと味濃くしてくれよ」
それを聞いたネネは、一瞬キョトン、とした後、追ってボロボロと赤い瞳から再びあふれ出した涙が、飛鳥の手の甲に零れ落ちた。

ロボット少女がいる非日常（１１）

『こんにちわ。月代に、孔雀蓮君が目を覚ましたと聞きました。体のほうは大丈夫ですか？　ご迷惑じゃなければ、お見舞いに行きたいのですが……』

そんなメールが届いたのは、飛鳥が目を覚ました日の昼だった。朝、昼と、ネネのそれよりも味が薄い病院食を泣きそうになりながら完食し、現状何も暇をつぶすものが無く、勿体無いと思いながらも有料のカードを差し込んだら見ることが出来るテレビで、お昼のバラエティ番組を見ていたところである。四六時中ネネと一緒にいるのもどうかと思ったので、ネネは家に帰して、学校にも行くように言っていたのだが、微妙にそれを後悔していた。

そして、件のメール。絵文字もからっきし無い、今時の女の子とは到底思えないガチガチの文章に、飛鳥は送り主の様子を想像し、ほほえましく感じてしまった。あの子らしい、と。

送り主は、四柳瑠璃。以前、月代の仲介でアドレスを交換したはいいものの、結局一度も使われてこなかったものである。

『どうやら大丈夫みたい（絵文字）勿論いいよー（絵文字）あ、何か暇つぶしになるような本を貸してくれると嬉しいかもしれない（絵文字）一週間もこんな生活は嫌だ（笑）』

相手とのテンションの差に、なんだか自分が、いわゆるチャラい男になったようで心配になりながらも、そんな文面のメールを送り返し、再び体を横にしてテレビの方を向いた。

かくして、メールが返ってきたのは一時間後であった。どれだけ四苦八苦しているんだ、と考え、そういえば授業があるか、という判断に落ち着いた。あの一目見ただけで真面目一辺倒な彼女が、授業中に携帯電話を弄くるという行為を許すわけが無いのだ。

『それはよかったです。では、数冊持って行きますね（絵文字）』

絵文字ひとつでも、飛鳥は「おっ」と思った。心を少し開いてくれたような気がした。
『頼む！（絵文字）』
『はい。それではまた後で（絵文字）』
「今日来るつもりかよ。なんて準備のいい」
瑠璃がくるということは、月代も来ることは確定のようだ。賑やかになることを、飛鳥は少しだけ楽しみに思った。昔の飛鳥なら鬱陶しく思うだろうが、四六時中喧しいネネと一緒の生活に慣れると、こういう長時間静かなのに違和感を覚えてしまうのである。
その事に気づき、飛鳥は微妙な気分になった。確かに賑やかなのは楽しく思えるようになった。しかし、以前の孤独を愛する一匹狼な自分も懐かしい、と思ったところで。かつての自分の中学二年生病加減に、なんて痛い奴なのだ、とテンションがダダ下がりしたわけである。

ロボット少女がいる非日常（１２）

学校が終わる時間から一時間半ほど経過したとき。
病室の引き戸が開いて、ネネを先頭に飛鳥のクラスメイト三人組が入ってきた。
「おにいちゃんきたよー」
「おう」
夕方に入って本格的に面白くなくなったテレビを消して、飛鳥は上半身を起こした。
「悪いね、わざわざ」
言って、枕もとに置いてあったメガネをかけ直して向き直ると、妙に沈痛な面持ちで俯いている曽我部詠輝が目に付いた。
「どうしたんだよ、曽我部？」
「……すまん！」
月代の後ろにいた詠輝が、前にズズイッと出てきて、突然床に頭をグリグリと埋めるような勢いで土下座をかましてきたのだ。
その様子を、背後に立つ月代は少し冷めた目で見ている。当然の行動だ、と言わんばかりに。
「うえ！？　ど、どうしたんだよ？」
しかし、飛鳥にとっては唐突過ぎた。酷く動揺しながら、助けを求めるような目でネネを見ると、ネネも少し驚いている様子で目を丸くしている。
「く、孔雀蓮を刺したのは、うちの部員なんだ！　すまない！　俺がしっかりしてなかったからこんなことに……！」
犯人の少年は、美少女研究会の部員だった。だから部長たる詠輝にも責任は生じるわけであり、その表情からは濃い心労の色が見えた。
「い、いやいやいや、こうして生きてるんだから別にいいって！」
人に謝られるということに、猛烈な気恥ずかしさを感じた飛鳥は、

両手を振って慌てて詠輝をたしなめる。
だが、詠輝はその顔を上げようとはしない。
「過激派の行動が……俺の予想の範疇を飛び越えてしまっていた。まさかこんな、怪我人を出してしまうなんて……」
この事件を発端に、いわゆる美少女な妹、姉を持つ男子生徒への陰湿な嫌がらせがこれまでも行われてきていたことも露呈している。
それは、詠輝の知らない所で行われていた。彼はこんなどうしようもない趣味をしているが、正義感だけは強かった故に、当然と言えば当然だが。
しかし”度の過ぎた美少女”たるネネの出現によってタガが外れ、今回の過激派による武力行使に出てしまった、とのこと。
「曽我部は悪くないからさ！　頼むから顔上げてくれよ！」
飛鳥としては、この気恥ずかしさから開放されたく、必死で詠輝を説得し、そして詠輝は渋々という感じで顔を上げた。
「……俺の注意不足だった。過激派の連中、隙があったらお前を殺そうと、付けねらっていたみたいだ。俺が、気づいていれば……」
それを聞いて．飛鳥は、今まで時々感じていた視線の正体を知った。期間を考えると、むしろ過激派達は相当我慢していたと言えるだろうか。
「過激派の奴らには制裁が加えられている．犯人の奴は退学、警察行きだ。美少女研究会自体も、無期限活動停止だ」
「じゃあ、もう狙われることは無いんだろ？」
ニッ、と、飛鳥は笑うと、詠輝も疲れた笑顔を浮かべて首を縦に振った。
「ああ。念には念を入れて穏健派を使って過激派を押さえ込んでいる。少なくとも、今度のようなことは絶対にさせない。今度こそ、誓う」

ロボット少女がいる非日常（１３）

詠輝が、部活の後始末が残っている、ということで早々に病室を出て行くのを見送って、飛鳥は月代と、その陰に半分隠れるように立っている瑠璃の方を見た。

「あ、四柳さん、本持ってきてくれた？」

その声に。瑠璃は恐れるようにギクン、と体を一瞬硬直させた。しかし、月代に促されて飛鳥の目の前に立たされ、瑠璃は顔を真っ赤にして俯いた後、両手で支持していた学生鞄を開けた。

「あ、あの、あの、こ、れを、持ってきました……。き、急でしたので、図書室から借りて……その……」

と。三冊の文庫本を差し出してきた。ごく普通の純文学っぽいのが二冊と、少しライトノベルチックなのが一冊。

なるほど、瑠璃は飛鳥をまた本にはまらせようとしているらしい。どれもこれも、一巻と表示されている。飛鳥はきっと全巻読破しないと気が済まないだろう。

「ありがとう。退院したら返すよ」

「あ、あのっ、よ、読み終わったら……そ、そのっ、メール、ください。続き、持ってきます、から……」

蚊が飛ぶような小さな声でそう提案する瑠璃。飛鳥の顔は直視できないのか、相変わらず俯いて、切りそろえられた前髪で顔を隠してしまっている。

「ありがとう。お言葉に甘えさせてもらおうかな」

そんなやり取りを、月代はニヤニヤと茶化すような笑みで傍観していた。そして、飛鳥の後ろではネネが器用に林檎の皮をむきながら、やり取りを、少し心配そうにチラチラと覗き見しているが、誰も気づいていない。

「は、はいっ！　ま、任せてください！」

精一杯の大声なのだろう。それでもやっと普通に聞こえるくらい

の大きさの声を出し、ギクシャクとお辞儀をした。
「そ、それでは、その、か、帰ります！　お大事に！」
「え？　あ、ああ、うん。ありがとうね」
一気にまくし立てるように言って帰っていく瑠璃に、飛鳥は圧倒されつつも、何とかそれだけを瑠璃の背中に伝えた。
なんて不器用な子なんだ、と飛鳥ですら少し心配になってくるほどだ。
月代は我慢ならなくなったのか、吹き出した。
「なんだよ？」
「いや、瑠璃は可愛いねえ、ホント。同性じゃなかったら絶対告ってるよ」
言いながら。月代は壁に立てかけてあったパイプ椅子を取って、飛鳥の横に座った。
「さて。本題に入ろうかな」
改まる月代に、飛鳥は怪訝そうな表情をし、その後ろではネネの心配そうな表情を一層強めた。

ロボット少女がいる非日常（１４）

「まあ、瑠璃の事なんだけどさ」
そう言って、月代は目を床に落として少し泳がせた。言葉を選んでいるのだろうか。
一つ一つ、口から言葉を絞り出していく。
「飛鳥。瑠璃のやつ、お前のこと、相当心配してたんだぞ。お前が刺されてから、あんまり、寝てないみたいだし。お前が救急車で運ばれた後に　死んだらどうしようって、みんなの前なのにワンワン泣いてた。……今日だって、ウチが誘う前に瑠璃の方から言ってきたんだぜ？　一緒に行く、って。あんな、自己主張がさっぱり出来ない根暗な子が……」
飛鳥は、どう反応していいか分からなかった。自分が知らない所で、そんなに心配してくれている人がいる、ということ自体が、飛鳥にしては理解できなかった。
何で自分なんかの心配をするのか、と本気で思う。自分には心配される価値もあるのか、とすら思う節があるのに。
「お前が起きた、っていう連絡があるまでもだ。大丈夫かな、大丈夫だよね、って、学校でも、家に帰って電話してても、お前のことばっかり。なあ。分かるよな？　瑠璃がお前をどんな目で見てるか？」
そんなに心配されて。そんなに他人から思われて。いくら鈍感な飛鳥でも分かる。しかし、釈然とはしなかった。
自分なんかに好意を持たれる理由が、理解できない。
「何で、僕なんかを」
「あの子、一年の頃からお前のこと見てた。女って、怖いんだぜー？　あんな社会不適合者みたいに人見知りする子でも、男の本質は本能的に分かるんだ。お前、自分が根っこはすごくいいやつだって気付いてないだろ。きっかけは知らないけどさ。孔雀蓮君はいい人

なんです、って、力説されちまった。で、あんな子の恋路、応援しないわけにはいかないだろ」
顔に、血が上るのを感じた。多分鏡で見たら、これまでに無いくらい顔が赤くなっている自分を見ることが出来るだろう。
情けない。友人とはいえ、他人の前で、こんな醜態を晒すなどと。両手で頭を抱えて、そのまま前屈するように倒れこんでしまった。
自分のことを恋焦がれている子がいるという事実は、今まで色恋沙汰とは無縁だった飛鳥に対しては、破壊力が大きすぎる、オーバーキル甚だしいものだった。
どうすればいいんだ、と悩みながら、反撃のつもりで、口を開いた。
「なんで……なんでそれをお前が言うんだよ。なんで、本人が直接言わないんだ。そういうのって変だろ。なんか、気持ち悪い、と思うぞ、それ」
そう。そんなの、飛鳥でも分かる。仲介役としての役目の範疇を、超えてしまっている。代わりに、思いを告げるなどと。
「ああ、そうだな。多分、ありえない行動だと思う。だけど、あの子が、具体的な行動に起こせると思うか？　何度、ウチがあの子の尻引っ叩いて、お前に告白させようとさせたことか。だけど、あの子は致命的に自分に自信が無い。駄目だ、無理だ、って聞きやしないんだ。多分、あの子は想いを隠したまま過ごすつもりなんだと思う。思いを持ったまま卒業しちまうつもりなんだと思う。……ウチは、自信過剰かもしれないけど、あの子のことを、理解しているつもりだ。あの子は、どうしようもなく弱くて、どうしようもなく、いい子だ。だから、絶対、好きになった奴と、幸せになって欲しいんだ。だから、頼むよ、飛鳥。今すぐじゃなくていい。だけど、ちょっとだけ、でいい。お前も、あの子のことを、見てみて欲しいんだ」
瑠璃に、興味を持ってやってくれ。好きになってあげてくれ。という、それは脅迫。いつぞやの昼食の時間の、あの月代の顔が、台

詞が、フラッシュバックする。

――ま、瑠璃泣かしたら本気でウチが殺すけどな

何だよそれ、と思う。誰かに強要された愛情など、本当の幸せに繋がるのか。

否。それは飛鳥でも分かる。

月代は歪んでいる。おそらく、月代は瑠璃に、歪んだ愛情を抱いている。だから、こんなことが平気で言えるのだ。

「……すまん。帰ってくれ。今は冷静に判断できない」

搾り出すように言う。ともすれば月代が怒り出しそうな気がしたが、しかし、飛鳥には今はそう言うしか選択肢は無かった。

今ここで、決断することなど、出来やしない。

「分かった」

ちょっとだけ不満げに、しかしそれだけ言って、月代は立ち去った。病室のドアを閉める音が、ちょっとだけ乱暴だったのが分かった。

月代は、飛鳥が諸手を挙げて瑠璃を受け入れる未来を想像していたのだろう。だけど、それは早計過ぎると、飛鳥は思った。

確かに瑠璃はいい子だ。しかも地味だけど、多分、クラスの中ではトップクラスに顔が整っているのは明白。だけど、だからといって、すぐにはいそうですかと受け入れることは出来なかった。

それは、経験が全くない飛鳥には、しょうがないとしか言いようがないことであった。いざこういう話が来ると、逃げてしまうタイプでもあった。

そして、そんな飛鳥の後ろにいるネネ。その表情は、酷く動揺していた。

だが、それ以上に動揺している飛鳥には、気付かれなかった。

ロボット少女がいる非日常（１５）

ネネは、自宅の台所に立って、一人分の夕食の準備を進めていた。
本当は食べなくても差し支えないのであるが、習慣とは恐ろしいもので、気が付くと病院帰りにスーパーに寄っていた。それに、こうして何かしらの作業をしていた方が、気が紛れて良い。
しかし、一向に気分が晴れることはない。以前から感じていた、自分の思考の違和感。それが、先ほどの月代と飛鳥のやり取りを聞いて、一気に膨れ上がった。
瑠璃が飛鳥に対して好意を抱いているのは、以前から知っていた。月代に、教えられていた。
よくよく考えると、この違和感は、瑠璃が飛鳥に好意を抱いているという事実を知ってから発生したもの。
全く相関が無いとは言えない。むしろ、これくらいしか思考の違和感の原因が思い浮かばない。
飛鳥に恋人が出来るかもしれない。本来なら、妹として、喜ばしいことではないのだろうか。しかし、諸手をあげて歓迎出来ない自分が、分からない。何故、と。
分からない。それが、凄く腹立だしい、気がする。
ネネの思考には、不快、という感覚が芽生え始めていた。
考えれば考えるほど。ネネの思考が熱くなっていく。
その感情を人間で言うならば、怒り、だった。しかし何故怒りを感じているのか。
瑠璃と飛鳥のことを考えれば考えるほど、その感覚は大きくなっていく。
いつの間にか、奥歯をギリギリと軋ませていた。味噌汁に入れる青葱を切る手に、自然に力が入り、乱暴になっていく。
わからない。わからない。何もわからない。自分がわからない。
熱くなる思考回路を冷やすために、冷却液が頭にどんどん送られ

ているのが分かる。だが、思考そのものは全く冷めない。むしろどんどんヒートアップする。
そして。味噌汁に入れる分の青葱を刻み終わった、瞬間。その怒りが頂点に達した。右手に持っていた包丁を、銀色のシンクに、叩き付けた。
金属と金属が激しくぶつかり合う、甲高い不協和音。
「ふー……ふー……」
外気を取り入れ、回路を冷やすために、深く、深く、呼吸を繰り返す。吐息が、異常に熱くなっている。
「ふー……ううう……ううぅぅ……うぇぇぇ……」
視界が、グニャリと歪んだ。
ボロボロと。涙が零れ落ちていく。その場にしゃがみ込んで、両手で目を擦りながら、ネネはすすり泣いた。
「な、なに、なんなんだよぉ……」
ネネは気付いていない。その感情は、瑠璃への嫉妬、そして、飛鳥への、恋愛感情。

幕間（2）

『瑠璃ってさー。好きな男とか出来てねーの？』

高校生活が始まってそろそろ半年ほどが経とうとしたある日のことだった。

極度の人見知り故に友達が非常に少ない瑠璃にとって、唯一の親友と呼べる、中学からの付き合いの月代と電話していた時の事だ。

他愛の無い内容の会話が、突然、瑠璃が最も苦手とする内容のものへと豹変し、襲いかかってくる。月代としては、ただ単に興味本位から聞いただけ。しかし、こういう話にまるで慣れていない瑠璃にとって、それは凶器だった。

ボムッ、と音が立つような勢いで一気に顔を真っ赤にした瑠璃は、寝転がっていた自室のベッドから慌てて起き上がった。

「なっ……！　い、いや、そ、の……！」

『おっ！？　その反応は何か隠しているなっ！　教えろよー。なー』

電話の向こうで、月代が目を輝かせている姿がありありと想像できる。瑠璃は、ベッドの上で挙動不審になりながらも、絞り出した。

「わっ、わっ、わらわ、ない？」

『笑わない笑わない。むしろ、逆に心配だったからさ。安心するよー。瑠璃でも好きな人が出来るんだな、って』

「っ――」

親友相手なのに、緊張する。どうしようもないほど顔が熱くなるのを感じる。だが、一度興味を持たれたら逃げられない、というのは、もう分かり切ったことだ。

『な？　笑わないからさ』

「くっ……孔雀蓮、君、です！」

『……』

月代にとって意外すぎる人物が挙げられ、向こうで笑うどころか絶句しているのを感じ取った瑠璃は、ベッドを平手でバンバン殴り

ながら、声を荒げる。
「ほ、ほらー！　ばっ、馬鹿にしてるじゃない！　だから言いたくなかったのーっ！」
『い、いやいやいや、馬鹿にはしてない。馬鹿にはしていないよ、うん。むしろ……何で？』
そして、その月代の言葉は、一般的に言えば正しいと言えよう。
孔雀蓮飛鳥。瑠璃と月代のクラスメイトであるが、クラスの中でも特に目立たない存在。休憩時間も何やら小難しそうなコンピュータ関連の本を読みあさって、他を拒絶しきっている、およそ高校生らしくない男子だ。彼が誰かと親しく話をしている姿を見たことが無いあたり、友人と言える存在は皆無なのだろう。
「つっ、月代、には、分からないよ、どうせ！」
そうは言っているが、実は瑠璃もあんまり分かっていなかった。悪く言うと特徴があんまりない、よく言うとごく普通の顔立ち。個人的な話はしたことがない故にどんな性格なのかもよく分からない。
しかし、入学直後から、なんとなく、彼の事が気になっていたのだ。
幼いころから本が大好きで、空想の世界で恋愛をするのが大好きだった彼女にとって、現実世界の男に対してそんな感情を抱くということは、ある意味カルチャーショックだった。
ひょっとしたら、ただの一時の気の迷いなのかもしれない。しかし、その不慣れな恋愛感情に、瑠璃は興味があった。大切にしたかった。
『分からんなー。あいつ、ただの根暗じゃん！？』
「わ、分からなくていいもん！　孔雀蓮君は、きっといい人だもん！　人の好みにケチつけるなんて酷い！」
『い、いやいやー、怒らないでくれよー。悪かったって。な？』
大人しかった瑠璃に、そんな強い言葉を投げつけられ、月代が電話の向こうで狼狽しているのが分かった。
『意外すぎて驚いたー。……ごめん』

どうやら相当凹んでいるらしい。呟くように言う月代に、瑠璃も一気に冷静になった。
「別に、いいよ。それにどうせ、私なんかに振り向いてくれるわけないもん」
そう。瑠璃は自分に自信なんてなかった。分相応に、本の世界で恋愛してればそれでいい、と思っている。こんな感情、外に出す必要なんて何もないのだ。
『そんなことねーって！　分かった、手伝う！』
「い、いいよ、そんなの……」
『大丈夫だって！　確かあいつ、ウチと同じマンションに住んでるからさ！　詳しく調べてやるぜー』
出た、月代のお節介体質、と、瑠璃は内心少しウンザリしつつも、強く拒絶することもできなかった。ひょっとしたら、という期待感も、ほんの少しだけあったのかもしれない。
そして結局、月代をパイプとして瑠璃と飛鳥の距離が近づき、普通に話せるほど親しくなったのは、更に半年以上経ってからであった。

ロボット少女は恋をする（1）

一週間を経て、飛鳥は退院した。まだ完全には傷が塞がってはいないが、家には帰れるようになった。勿論、体育の授業はしばらく見学であるが、飛鳥的には逆に嬉しいことである。

「うはー、不味い不味い病院食ともこれでおさらばだ―」

学校を休んで迎えに来たネネと一緒に病院を出て、飛鳥はその開放感を満喫した。基本的に引き籠り体質な飛鳥であるが、四六時中ベッドの上で過ごし、味がほとんどない病院食を胃に運ぶ作業をするのは、辛いものがあった。それに、出来ないこともたくさんあって色々と溜まってしまっているのである。

「今日は、おにいちゃんが好きなもの作ってあげるよ？　何がいい？」

「本当？　じゃあ、とりあえず肉！　魚と野菜だけの生活はもう嫌だ。分かる？　味噌汁さえも味が無いんだぜ？　あんなのただの茶色い水だ。それに比べたらネネの味噌汁が辛く感じちゃうよ」

以前の無口な彼からは想像もできない、明るい言動にネネは隣で小さく笑い、飛鳥の顔を仰いだ。

「あはは。健康のためには参考にしたいんだけど、おにいちゃんがストレスで参っちゃうね？　わかった。夕方になったらおっきなお肉買ってくるよ」

「頼むー」

そして、いつものようにネネのマシンガントークが始まった。しかし、今日は飛鳥もきちんとそれに応対しているあたり、相当機嫌がいいようである。

チャンスかもしれない。そう思ったネネは、会話が一区切り付いてから、少しだけ控えめに口を開いた。

「ねえ、おにいちゃん」

「ん？　何？」

「……結局さ。瑠璃先輩のこと、どうするの？」
その言葉に。飛鳥は、浮かべていた微笑みを、苦笑いに歪めた。
その節々に、狼狽の色が見え隠れする。
飛鳥が入院している間、瑠璃は三度、見舞いに訪れている。というよりも、飛鳥に、本を貸してくれー、と呼ばれたからという理由もあるのだが。
いつ来ても、彼女は顔を真っ赤にしてしどろもどろになっていた。しかし、本人は飛鳥に向けられた好意を飛鳥が知っていることは、知らないようだった。いつも通り、だった。
きっと彼女の性格から、飛鳥が知っていると、知ってしまったら、飛鳥を避けるだろうに。
だから、飛鳥も知らないふりをしていた。結論を出すのを、先送りにしていた。
しかし本音を言うと、あまり乗り気ではなかった。それは、月代から気持ちを押し付けられたことに対する対抗意識のようなものもあったのかもしれない。それに、何より。自分なんかが、という気持ちが強かった。自分よりも優しくていい男が、他にいるだろうに、と。
「どうだろうね。まだ決めてないよ」
「そ、そう、なんだ……」
断るにしても、機会も、口上も、全然分からない。きっと断ったりしたら、今の少しだけ心地よいと思っている、瑠璃との関係が完全に崩壊する。それだけならまだしも、月代との関係も崩壊するし、詠輝との関係も、間接的に崩壊しかねない。
それが、怖かった。友人を失うのが、こんなにも怖いものだとは、思ってなかった。
有耶無耶に出来るなら、それが一番いい方法だと、飛鳥は考えていた。そのうち、瑠璃の方が心変わりしてくれる。そう信じて、飛鳥は逃げていた。

ロボット少女は恋をする（2）

飛鳥が退院して三日ほどが経った。
このところ、ネネはあまり調子が良くなかった。
勿論自己診断プログラムで異常をきたせば、技術的な問題として和飛の元へと連絡するべきなのであるが、プログラムの答えは至って正常。つまり故障している部分はない。
毎度のように、その調子が悪いのは、思考部分。何をしても集中出来ないのである。思考が宙に浮いているようで、気持ちが悪い。
勿論、勉強などは目立たない程度に難なくこなしている。料理だって、漫画のように塩と砂糖を間違えるようなことも、指を切ったりすることも無い。
「ネネちゃん、大丈夫？」
言われ。ネネは慌てて思考の渦から抜け出した。
目の前で、クラスメイトの女の子二人がネネの様子を少し心配そうに見つめていた。
「へ？　あ、ごめんなさい。ぼっとしてた」
そう言って、お弁当を突くのを再開する。
今は昼休憩。ネネは、席が近隣というわけで真っ先に仲良くなった女子と弁当を食べていた。
「でも、ネネちゃんちょっと元気ないね。何かあったの？」
飛鳥が刺されたことは、もう彼女らは知っている。そして、退院したことも。
にも関わらず元気のないネネを、彼女らは心配していた。
「なんかね、モヤモヤするの」
ネネは、ちょっと行儀悪く箸を噛みながら、言った。人間の彼女らなら、何か別の視点から原因に気付いてくれるかもしれない、と期待して。
「おにいちゃんのことがね、好きな人がいるんだ。おにいちゃんの

クラスメイトの人なんだけど。で、今おにいちゃんと結構いー感じになってるんだけどね。なんだか、それが、ネネ、嫌なの。お、おかしいよね。おにいちゃんに恋人が出来るってこと、ネネ、素直に喜べないの。おにいちゃんのことを考えると、なんか、頭の中がモヤモヤして、わけが分からなくなるんだ」

ネネの悩みを。友人らは、真面目な表情でうん、うんと相槌を打ちながら聞いていたが、やがて、一人が、少し、恐る恐るといった感じで口を開いた。

「……それって、きっと恋だよ」

「こい？」

ネネはそう言われ、首を傾げる。

「うん。恋。ネネちゃんは、お兄さんの事が、大好きなんだよ、きっと」

ネネは飛鳥の事は好きだ。しかし、それは家族に対して抱く好きだったはず。恋だ、と言われても、実感は湧かない。

「はぁー……すごいなー。漫画とかだけの話かと思ったよ。お兄さんに恋しちゃう妹なんてさ」

もう一人の友人が、感心するように、言った。

場合によっては、異端扱いされそうな話である。しかし、この学園の生徒ということが幸いした。もっとどうしようもない恋愛感情を抱いている変な人達が、この学園には沢山いる。美少女研究会を筆頭に。

故に、珍しいことではあるが、引くようなことは無かった。

「恋……。恋、か……」

ネネが反芻するように言う。なるほど、確かにネネの症状は、ネネの知識にある恋のそれかもしれない。

しかし。友人二人は、少し気の毒そうな表情でネネを見ていた。

当然である。血のつながった兄に恋をしているように映っているのだ。常識的に考えると、それは抱いてはいけない感情。

「あ、あの、ネネちゃん。あたし、応援するよ？　ネネちゃんのこ

と。お兄さんが相手でもさ、好きになっちゃったんだから、しょうがないもんね」
「うん。私も」
彼女らは、本気でネネの事を心配しているような目をしていた。
あんまり心配かけるわけにはいかない、と。ネネはいつもの元気な笑みを浮かべた。
「ありがとう！　じゃあ、何かあったら相談するね？」
そうは言ったものの。この感覚が恋だと知って。ネネには、どうすればいいのか分からない。
自分は妹で、そもそもロボットだ。恋愛なんて、そもそも、告白するなんて、ナンセンス甚だしい。
ロボットと恋愛をするなんて。飛鳥に多大な迷惑がかかってしまう。ただでさえ、瑠璃との事で悩んでいるのに。そこに、自分がでしゃばって入っていく余地なんて、無い。
これまで通り、妹として、飛鳥と接していくのが、最良の判断。
でも。飛鳥と、兄弟という関係を超越した関係になる。それはとても、魅力的なことだと、ネネは思ってしまった。
飛鳥と恋人同士になりたい。瑠璃を排除したい。そんな欲求が、芽生えてしまった瞬間だった。

ロボット少女は恋をする（3）

飛鳥もネネも、自分の答えを見つけられないままだった。
瑠璃は飛鳥のことが好き。だから、瑠璃のことを好きになってやってくれ、という月代の一方的な願いに対する、答え。
ネネが感じる、飛鳥への違和感。クラスメイトに指摘され、それが恋だと気づき、しかし気づいたからと言ってどうすればいいのか、という自分の袖の振り方への答え。
別に生活が劇的に変化したわけではない。飛鳥も悩んでいる風であったが、妹であるネネにあまり心配かけたくないという兄としての配慮は行っているらしい。そして当のネネも、自分がどうすれば良いのか分からず、思考の渦に入り込んでしまうことが多々あった。勿論、飛鳥の前ではあまり悩まないようにしている。この気持ちを、飛鳥に知られるのはまずい、と、なんとなく分かっていた。
お互いが、お互いに悟られないようにし合っている状態。軌道に乗り始めた兄妹としての生活に生じた、ちょっとした溝。
それを作った元凶、瑠璃、そして月代。ネネは、ちょっとだけ、この二人を恨んでいた。
自分勝手な理由で、自分と飛鳥の間に土足で入り込んできたことを。
特に、瑠璃。自分には、血の繋がった妹という設定と、機械だということ、という絶望的過ぎる二つの壁があるのに。瑠璃は、あろうことか月代という協力者に、飛鳥へ想いを告げることを、丸投げをした。自分で苦労せずに、飛鳥に気持ちを伝えた。なんて、卑怯。
人間を恨む、ということをさも当然にやっていることに、ネネは気付いてなかった。本来ならば、命令に従わねばならない相手であるはずの、人間、それも、個人に対して敵対的思考を行ってしまっている。
それは、本来ネネには不可能なはずの思考、だった。

そろそろ入梅したかという、ジメジメとした雨の日の放課後。
住宅地を、ネネは一人で歩いていた。
右肩にスーパーで買った食材を詰めたエコバッグを提げ、左手に持った傘の支柱を、左肩に置いて。
近所の小さなスーパーでは売っていない、ちょっと珍しい食材を求めて、学校をはさんで家とは反対側にある大手スーパーに行った、その帰り。
飛鳥はあの傷害事件以降、微妙に体調が優れないことが多くなっていた。記憶が飛ぶほどのショックを受けたのだ。その上、あの瑠璃に対する心労である。当然といえば当然であろう。
というわけで、学校が終わったら飛鳥はそのまま家に帰り、ネネが買い物に行くことも多い。
どれもこれも、あの人のせいだ、と。瑠璃に全て押し付ける、黒い思考に陥りながら、帰路を歩いていたネネが、立ち止まる。
学校の近くだった。下校する生徒は、もう無い。雨故にグラウンドを使用する部活も行われていない。静まり返った、住宅街。
道路の端に、生徒が一人、しゃがみ込んでいた。傘を右手に、左手を道路わきに放置された箱の中に差し伸べている、小柄で地味そうなメガネの少女。
「瑠璃先輩。どうしたんですか？」
話かけて。ネネ自身が、驚いた。自分の声の、どうしようもない暗さに。
瑠璃が、髪を揺らしながら慌てて立ち上がり、こちらを向いた。
「い、いえっ、その……」
ネネは、無表情で瑠璃に詰問するように歩み寄る。
そして、瑠璃の足元の箱を見下ろした。
「……猫、ですか」
水を含んで今にも崩れそうな小さな段ボール箱と、その底に敷かれた濡れきったタオル、の上に寝かされた、小さな猫。生後間もないわけではないが、大人というには小さすぎる、子猫。

衰弱しているということは、誰の目からも明らかだった。
「ひ、酷い、ですよね。モノじゃない、のに、捨てちゃうなんて……」
どもりながら、しかし必死に、捨てた人を非難する瑠璃の目の端に、光るものがあった。
だがしかし。そんな瑠璃は、ネネをイラつかせた。相手が、このところネネを悩ませ続けている元凶であるという事実が、ネネをそんな感情に駆り立てる。
そもそも瑠璃の気持ちなど知らなければ、ネネも自分の気持ちに気づかず、こんなに悩む必要などなかったのだ、という、酷く自分勝手な考えを、ネネは抱いていた。
「何が分かるんですか、瑠璃先輩に？」
「……え？」
てっきりネネも同意してくれるものと思っていた瑠璃が、絶句して動かなくなった。信じられない、という風に、ネネを見つめる。
「例えば、この猫が、飼い主に虐待されるような環境にいたとしたらどうです？　痛めつけられながら、いきていくよりも、ここで、こうして死んでしまった方が、この子にとっては幸せなのかもしれません。どういう生き方が幸せなのか、本人しか分からないと思いますよ？」
「そ、そんな……ひ、ひどい、酷い……です……」
「じゃあ飼ってあげればいいじゃないですか。そうして手を差し伸べて、同情するだけして、可愛そうだと思って”あげて”いる自分に、酔っているんですか？　ホント、人間のエゴってどうしようもないですね」
違う。本当はネネはそんなことを言ってはいけない。ロボットは人間を、肉体的にも、精神的にも、傷つけてしまうことは禁じられている。
しかし。芽生え始めてしまった、人間特有の、嫉妬や憎悪という汚らしい本音が、ネネを突き動かしていた。ロボット工学三原則な

どまるで無視した行動に、駆り立てていた。
「で、出来ないんですよ！」
この人が、そんな声を出すのか、と。瑠璃の罵声に、ネネも驚き、たじろいだ。
「家が！　アパートが……ペ、ペット……禁止、なんです！　許されるなら、私だって！　飼ってあげたいですよ！」
今まで、瑠璃が誰にも向けたことが無いような、人見知りという殻を突き破った、むき出しの、強い、強い激情。
「何なんですか、さ、さっきから！　私、何かネネちゃん、が、い、い、嫌がるようなことを、しましたか！？」
していない。少なくとも、瑠璃が、直接何かしたというわけじゃない。ネネが勝手に、瑠璃を恨んでいただけ。
そう思い。自分の汚さに、ネネは自分が嫌になっていくのを感じた。異常に頭が冷めていくのを感じた。
ネネの憎悪の精神。それは人間特有のもの。しかし、瑠璃の慈愛の精神。それも、人間特有のもの。
そして、そのどちらが、人として相応しいか。そんなもの、ネネにだって分かる。
こんな汚いことを考える自分なんか、飛鳥には似合わない。ネネは、自己完結してしまった。
「いえ何も。……ごめんなさい」
そして、沈黙。
いっそう激しくなった雨だけが、二人の間を降り抜けていく。
嫌な沈黙がしばらく続くが、先に動いたのは、ネネだった。携帯電話を、バッグのポケットから取り出す。飛鳥の番号をダイヤル。
しばらくして飛鳥が電話に応答した。
『もしもし。どうしたの？』
「あ、おにいちゃん？　猫、拾った」
『はぁ！？』
「猫。連れて帰る。確かペット禁止じゃないよね？　お兄ちゃんは

猫の飼い方とか調べててよ」
『いや、えっ？』
「じゃ」
今一理解しきっていないような飛鳥の文句をかき消すように、通話を切る。そしてネネは、箱から猫を抱き上げ、空いている右手で支えた。
「意地悪言ってごめんなさい。瑠璃先輩はいい人です。お兄ちゃんと一緒になっても、きっと上手く行きますよ」
そう言い残して、ネネは瑠璃の前から立ち去った。
あまりに急なネネの行動に、瑠璃は何の反応も示せなかった。ただただ、呆然と、その場に立ち尽くしていた。

ロボット少女は恋をする（4）

居心地が悪い。飛鳥はそう思った。
半ば押し切られるように猫を飼うことを許可し、ネネがつれて帰ってきた猫を動物病院に連れて行き、検査のために入院させてきた帰り道。
相変わらず降り止まない雨の中、飛鳥とネネは並んで歩いていた。
動物病院がこんなにもお金がかかるものだとは思わなかった。随分と軽くなった財布に凹んでいることもあるが、それよりも心配なのがネネだった。
買い物に行く前。放課後に学校前で別れたときには至って普通な様子だったネネが、今は別人のように黙りこくっているのだ。いつものマシンガントークを浴びせてくるわけもなく
しかも、無表情だった。人間の部分をどこかに置き忘れてきたかのような、無機物のそれである。
飛鳥が思いつきのように話を振ってみても、その反応は悪い。一言二言会話をして、それで終了。
「な、なあ」
「なに」
「ネネ。どうしたんだよ？　買い物行く前は元気だったじゃないか？」
「別に……なんでも、ないよ」
「なんでもないこと無いって。何なんだよ、一体？　ネネらしくない」
「ネネらしいって、なに？」
ギョッとするほど、機械的な声。飛鳥は思わず立ち止まった。
飛鳥が刺されるという波乱もあったが、以前よりも断然楽しくなってきた日常生活を粉微塵に破砕するかのような、ネネのその声に、ある種の恐怖を抱いた。

「ネネ、所詮は機械だもん。今までお兄ちゃんたちに見せていた感情だって、ただのプログラムだよ？　それを実行してるだけなのに、ネネらしいもクソも無いよ」
言って。振り向くネネの表情は、先ほどと変わらない、無表情。しかし、飛鳥は人形が突然しゃべりだしたかのような恐怖を覚えてしまった。
「な、何、言ってるんだよ？」
かろうじて搾り出した飛鳥に、しかしネネは淡々と続ける。
「きっとネネは欠陥品。ロボットの癖に、お兄ちゃんのことを自分のものにしたいって思ったり、お兄ちゃんに好意を抱いてる瑠璃先輩に嫉妬しちゃったり……。ネネ、何なのかな？」
それは、ネネの悲鳴だった。飛鳥には、具体的にネネに何があったのか、分からない。しかし、自分の存在を否定しようとしていることは分かった。
その否定を肯定するようなことは、何があってもやってはいけない。相手がロボットであっても、人間であっても。
「ネネは、妹だ」
搾り出すように、呟くように、そう言った。
「最近は、ネネが、ロボットだっていうことを、忘れることもある。僕にとってネネは、大事な妹だ。だから、自分を否定するような哀しいことは、やめてくれよ……」
本心だった。ネネを説得する為の優しい嘘だとか、そういう類のものではない。実際、ネネという存在は、飛鳥の中で非常に大きなウェートを占めるようになっている。
「ばかだね、おにいちゃん」
ロボットの自分を、妹だと言ってくれる。それはとても嬉しい事だった。
しかし、ロボットを妹だと思うことの、空虚さを思い、ネネは笑った。悲しい悲しい、悲痛な笑みを浮かべて。

ロボット少女は恋をする（5）

家に帰って、ネネは全てを打ち明けた。
飛鳥に、兄妹以上の感情を抱いてしまっていること。
瑠璃に嫉妬し、恨んでしまったこと。
今日、瑠璃を言葉で傷付けつけてしまったこと。
そこにロボット少女はいなかった。飛鳥という一人の人間に恋する、ただ一人の少女として、ネネは存在していた。
飛鳥はそれを聞いて、両手を額に当ててその場に俯いてしまった。
正直なところ、相当混乱していた。色恋沙汰など経験したことの無い飛鳥にとっては、同時に二人から想いを向けられるのは、重すぎる。
「悩まなくていいよ。おにいちゃんは、瑠璃先輩と付き合ってあげて。あの人は、凄くいい人。あんまりお話したことないけど、分かる。ネネなんて比べ物にならないくらい、優しい人だよ」
お茶でも入れるね、と小声でそう続け、台所へと向かおうとするネネを、飛鳥は呼び止めた。
ネネに背を向けたまま俯く飛鳥の背中は、ひどく狼狽しているのが感じ取れるほど、小さく見えた。
「それで、いいのかよ。ネネは、それで納得できるのかよ……」
「兄妹っていうのは、設定。本当はネネとおにいちゃんは赤の他人。だからそんな設定いくらでも解消できる。でも、ロボットと人間、っていう溝は、ちょっと絶望的なんじゃないんかな」
そう。人間性云々、という話をする前に。飛鳥という人間と、ネネというロボット、という、絶望的なまでに深すぎる溝が存在していた。
「きっと、ネネという存在は、いちゃいけないんだよ。いくら高性能な演算が出来たとしても、おにいちゃんを守ることも出来ないし、人に嫉妬して傷付ける。役立たずなんだよ」

「そ、それは違う！」
反論しようと飛鳥が振り返ると同時に。ネネが、両手を背中の方で組んで、クルッと、軽やかに振り返った。ロボットとは思えない滑らかさで。
そして、笑う。自分を馬鹿にしきった、自嘲の笑みを浮かべて。
「じゃあ、おにいちゃんはネネと恋人同士になってくれる？　こんな、嫉妬深くて、自分勝手で、全身機械の体の、ロボットを。……開いてるところは開いてるよ？　きっと人間の女の人とするよりも数倍気持ちよくしてあげることもできる。一応、愛玩人形としての役割もあるからね」
言って。ネネはその小さな手を、下腹部に当てた。その意図を悟り、飛鳥は真っ赤になった。しかし、それだけだった。反論、出来なかった。恋人になれるか、という質問に対して、答えられなかった。
「……でもね。ネネは、おにいちゃんの、傍にいちゃ、ダメ。おにいちゃんが大好きになって、おにいちゃんをネネのものにしたくなっちゃう。きっと、その気持ちがどんどん大きくなっちゃう。ネネ、断言できる。そのうち、おにいちゃんを自分の物にするために、瑠璃先輩を殺しちゃうよ」
ぞ、っとした。氷柱で刺されたかのような寒気が走る。ネネは、そんな台詞を、平然と言ってのけた。
ネネの中には、ロボット工学三原則など、既に存在していなかった。
得てしまった、人間らしい理性。和飛が言うところの、自分の欲望のために行動できる思考。人間ならば誰しもが持つ、我儘で自分勝手な部分に、ネネは振り回されていた。初めて得たものを使いこなせず、暴走していた。
「だからね。おにいちゃん。ネネ、帰るね。おにいちゃんの傍には、もういちゃいけないんだ。こんなロボットに、愛されるなんて……おにいちゃんのためにもならないし」

言って。寂しげに、目を伏せ、続けた。
「ネネの、ためにも、ならないし」
飛鳥は、何も言えなかった。反論することも。受け入れることも。ただ、沈黙するしかなかった。
折角人間の思考が出来るようになったのに。人間と自分が、致命的に違うことを、完璧に理解してしまった、哀れなロボット少女として、そこにいた。

ロボット少女は恋をする（6）

ネネが研究所に帰った。ほんの一カ月と少しだけの共同生活であったが、それでも、ネネが飛鳥に与えた影響は大きかった。

自分の料理の不味さに絶望した。塩っ辛いばかりの飛鳥の料理に比べて、ネネの料理が、いかに美味であったか。

朝起きれなかった。ネネが帰って三日ほどは、連続で遅刻しそうになった。ネネが起こしてくれるという悪習慣が、身に染みてしまっていた。

そして、一人暮らしの部屋の静けさ。もうあの騒がしさは戻ってこないのか、と思うと、口惜しすぎる。

あの時ネネを制止出来なかったことを、後悔していた。もっと上手い解決方法があったのかもしれない、と。

「おらー。飯だぞー」

自分の料理と餌皿を持って居間に入ると、動物病院から連れて帰った猫が早速じゃれついてくる。

この猫を拾った経緯は全く知らないが、随分と人懐っこい。ひょっとして散歩中の家猫をネネがとっ捕まえてきたんじゃないんだろうな、と邪推しつつ、自分の料理が載ったお盆を卓袱台に置いた。

去り際にネネに注意されて以来、料理には気を使うようになった。加減が分からず、辛いか味が無いかのどちらかになりがちであるが、一週間でだいぶこなせるようになった、気がする。

なんとなしに、夜のバラエティ番組にテレビのチャンネルを回した。

瑠璃との話は全く進展していない。しかし、どうするかは、もうほとんど確定していた。瑠璃を選ばなかったら、ネネが譲歩した意味がなくなってしまう。

あれだけ渋っておいて、結局、自分の気持ちで動けない自分に嫌気が差しながらも。付き合って、それから好きになっていけばいい

や、とポジティブに考えた。そういう恋愛の形も、あるんだ、と。
明日あたりに話をしてみよう。瑠璃の気持ちを、直に聞かせてもらおう。
ちょうど瑠璃経由で借りた図書室の本があるから、それを返却するついでに、瑠璃が図書委員の仕事が終わるまで待っておこう。自然な、いい口実だと、恋愛に不慣れながらにいい口実だな、と思う。

一口、味噌汁を啜ると、程よい甘辛さが口の中に広がった。
「……うん。成功。流石」
飛鳥の自画自賛は、騒がしいテレビの音に掻き消された。

ロボット少女は恋をする（7）

「はい、それでは貸し出し期間は二週間ですので……」
掻き消えそうな、小さな蚊の飛ぶような声。図書室という静かな空間でなければ絶対に聞き取れないだろう。
瑠璃は本好きが興じて図書委員をしているが、こうして図書室で貸し出し業務を行うのは、すごく苦手だった。業務とはいえ、知らない人に声をかけるという行為がひどく困難なことだと考えているのだ。
本を借りて行った生徒を見送った後、再びカウンターの下で開いている文庫本に目を落とした。なるべくなら人は来てくれるなと心底思いながら。
しかし、その願いむなしく、視界の端で、図書室のドアが開き、黒い制服のズボンに包まれた足が見えた。男子生徒だ。
何気なしに顔を上げる。
「……や、やあ」
孔雀蓮飛鳥だった。瑠璃と目が合い、彼はちょっとだけ気恥ずかしそうにしながら右手を上げてカウンターに歩み寄った。
「突然来てごめん。これ、返しに来た」
と。図書室のラベルが貼られた二冊の文庫本を手渡してくる。
「あっ、あ、はい、わざわざありがとうございます。というか教室で渡していただければよかったのに……」
言いながら、自分の学生証の磁気テープと本のバーコードを使って返却作業を行う。瑠璃が借りて、飛鳥へと又貸しが常であった。
「んー。まあ、その。ちょっと用事があったから。四柳さん、仕事いつまで？」
「あ、あのっ、その……ろ、六時、までです……」
要するに、図書室が閉まるまで、ということだ。現在時刻が四時半だから、あと一時間半ほどだ。

「ふぅん。じゃあ、待ってるから」
言って、飛鳥は図書室の奥へと消えて行ってしまった。
「……はひ」
急速に顔が熱くなっていくのを感じた。血がどんどん頭に上ってくる。
馬鹿みたいに早鐘を打つ心臓は、制服の上から押さえつけなければ、飛び出してしまいそうな錯覚を受ける。
何で。何でいきなり来るのか。しかも、待っている。つまりは自分に用事があってわざわざ来たということだ。
「あ、あの」
顔を真っ赤にして俯いていると、突然話しかけられて慌てて顔を上げた。
「は、はひぃ！？」
カウンター越しに立っている女子生徒は、瑠璃のただならぬ様子に引きまくっていた。
「こ、これ……」
貸し出し、だった。
「はいはいはい！　ちょっと待っててくださいね、はい！　が、学生証を……！」
裏返って耳障りなまでに甲高くなった声を上げ、静かな図書室中の視線を浴びることになってしまった。

ロボット少女は恋をする（8）

「あ、あのっ。へ、閉館、時間です……」
図書室の奥まったテーブルで、先ほど借りていた小説の続巻を読んでいた飛鳥のところに瑠璃がやってきた。気が付くと、もう図書室内には飛鳥と瑠璃しか残っていなかった。
「んっ？　あ、ごめん。これ、借りていい？」
「あっ、はい、どうぞ。貸し出し手続きしますから、こ、こちらへどうぞ。貸し出しには学生証がいりますので」
カウンターへ促し、読み取り機で本の管理バーコードと、差し出された飛鳥の学生証の磁気を読み取らせた。
「はい。か、貸し出し期間は二週間です」
「ありがとうー。いやー、最初はどうかと思ったけど、すっかりハマっちゃったよ。言葉遊びが面白いね」
「そ、そうですね。その作者さんの最初期の作品で、ま、まだ作風は安定してないんですけど、センスは今と変わってないです、はい」
言いながら、読み取り機が繋がっているパソコンの電源を落とした。カウンター下の引き出しから図書室の鍵を取って、床に置いてあった自分のカバンを拾い上げた。
「で、では、帰りましょう」
「うん」
二人揃って、図書室を出た。
鍵を職員室に返しに行く瑠璃を待って、二人揃って下駄箱を出た。
「そ、そ、それで、何か、わ、私に用事があったのでは……？」
「そうそう。それなんだけどさ」
並んで校門に歩いて行きながら、飛鳥は軽く頭を掻きながら、悩んでいる風にしばらく言い淀んだ。
瑠璃は不思議そうな顔をして飛鳥を見ていたが、飛鳥がこちらを向いて目があった瞬間、慌てて眼を伏せた。

「そのー。ぼ、僕のことさ。好き、なんだってね？」
飛鳥のその言葉に、瑠璃姫はまるで畏怖するかのように体を強張らせ、その場に立ち止まった。
「え、いや、その……え？」
飛鳥の言葉を理解できない風に。瑠璃姫は、思わず半笑いの笑みさえ浮かべたまま、動かなくなった。
飛鳥も何も言わない。瑠璃姫が、自分の言葉を咀嚼し、理解してくれるのを、待ち続けた。
「なん……で……」
ようやく搾り出す。しかし、その声は、恐怖の色に塗れていた。何で知っている。何故ばれた。自分は、全てを隠していたのに。そんな色を、声に乗せている。
飛鳥に畏怖し、一歩後ずさった。力が抜けて、鞄が手から地面に滑り落ちる。
「美崎が。教えてくれた」
「っつ、き……よ……？」
瑠璃は、その事実にショックを受けた。親友たる、美崎月代の介入。それは、この想いを隠したままにしたかった瑠璃にとっては、裏切り行為甚だしいものである。
こんな自分が、他人に好意を向けるという行為が、相手にとって多大な迷惑となると考えていた。
「ご、ごめん、ごめんなさい！」
そして、しゃがみ込み、両手で頭を抱えて、そのままうずくまる。
そんな瑠璃の拒絶反応に、飛鳥は驚くしかなかった。
「な、何で？　何で謝ってるの？」
「め、めいわく、めいわくだよね、そうだよね……ごめん、ごめんなさい……ごめんなさい……あああああ！」
ぶんぶんぶん、と。狂ったように頭を振って。立ち上がり、そのまま走り去ろうとする。逃げたかった。逃げるしか、瑠璃には選択肢が無かった。

だが、それを飛鳥が制止した。瑠璃の手首を、飛鳥は慌てて掴んだ。この手を放したら、この子はもう自分の前に現れない。そんな気がした。ネネが去るのを制止できなかった分を、取り返したいという願望も、あった。

「迷惑じゃない！」

飛鳥の大声に。瑠璃は手首を振りほどこうとする抵抗をやめた。腰が抜けたように、その場で崩れ落ちるようにして、座り込んでしまう。

「迷惑じゃない。迷惑じゃないから。だから、四柳さんの、口から、聞かせて欲しいんだ。四柳さんの気持ちを。美崎の言葉じゃなくて、四柳さんの言葉で！」

「っ～～！」

ギュッと閉じた目の端に、感極まって涙が零れ落ちる姿を見て、飛鳥は罪悪感に駆られた。何でこんなに強要しているんだろう、と。

飛鳥も、不器用だった。不器用だから、こんな、スマートじゃないやり方しかできない。

瑠璃の前にしゃがみこみ、瑠璃と視線を合わせた。涙で濡れた、黒目がちで大きな瞳を、覗き込む。

瑠璃は、何か言おうとして口をパクパクさせているが、出てこない。言葉を選んでいるのか、分からなくなっているのか。

「落ちついてよ。僕の気持はもう決まってる。だけど、美崎から又聞きしただけじゃ、納得できないし、なんか気持ち悪いもん。通過儀礼みたいなものだと、思ってさ」

「ふ……う、あ……す、すっ……うぅ……」

動揺で震えきった声を出し、小休止のように大きく息を吸い。そして、たたみかけるように、やけくそのように、言葉を吐き出した。

「すき、なん、です……くっ、くじゃく、れんっ、君の、ことがぁ……っ……」

「……うん。分かった」

飛鳥は、立ち上がり、瑠璃に手を差し伸べた。内心、直接気持ち

をぶつけられて飛鳥も動揺していたが、表に出したらかっこ悪いと思い、必死に押し殺していた。
「その。何だ。よ、よろしく」
それは、これから恋人同士になるという、飛鳥なりの返事。今はこれが精一杯であった。

ロボット少女は恋をする（9）

しかし、折角なのだから恋人っぽいことをしてみよう、という飛鳥の提案から、初心者カップルに優しい、映画館デートでもしてみることにした。

丁度、瑠璃が知っている作家が書いた小説を映画化したものを上映していた。

飛鳥も今までデートと呼べる活動をしたことが無いし、さらに相手はあの瑠璃。ガチガチに緊張しきってしまっている彼女が相手ではまともにコミュニケーションを一つ取るのでも難易度が高いと言える始末であり、相当ボロボロな結果になっていた。しかしまあ、お互い初めてなのだから、ということで、飛鳥は別に気にしていない。

そんなわけで、土曜日の夜。瑠璃とデートのようなものをした飛鳥は、家に帰ってきたわけである。

鍵を、開ける。

「……あい、てる？」

開ける方向に鍵を回しても、空回る。ほぼ同様のイベントが、少し前にあったことを思い出す。

「またか」

父親、和飛が来ているのだろう。ついでだ。ネネの事を聞いてみよう。なんとなく、深く詮索するのも躊躇われ、結局ネネが帰ってから連絡も何も入れていないのだ。

思いながら、ドアを開けると、しかしそこには予想だにしない光景があった。

玄関にキチンとそろえられた、子供サイズな靴。

「……！」

飛鳥は、それを見て、誰が来ているかを即座に判断し、靴を脱ぎ散らかして居間へ向かった。

飛鳥も、寂しかったのだ。もうあまり、最悪二度と、会うことも無いのだろうなと思っていた人物が存在している。
素直に嬉しかった。戻ってきてくれたのか。
そんな希望的観測を抱きながら、居間のドアを開けた。
「ネネ！」
そして、そこにいた。膝の上で猫を寝転がせて、そのあまりよろしくない毛並みを梳くようにゆっくり撫で摩る、ネネが。
「あ、おかえり」
思わず張り上げた飛鳥の声で目を覚ました猫が、四肢を思い切り伸ばした後、ネネの膝の上から立ち去った。
そして、当のネネは。あの無邪気な笑みはもうどこかに置き忘れてきた、と言わんばかりの、自嘲的な笑みを浮かべて、続けた。
「おにいちゃん」

ロボット少女は恋をする（１０）

「で。なにかあったのか？」
卓袱台を挟んでネネと向き合った飛鳥は、恐る恐る、という声色で問うた。沈んでしまっているネネの気分をこれ以上沈ませないように。傷付けないように。
ネネは、飛鳥の前で俯いたまま、口を開いた。
「あ、あのね……」
「うん」
「ハカセ、がね……ネネは、成功例、だって」
その言葉を、飛鳥は軽く天井を仰いで考えた。
そもそも、ネネの起動実験の目的は何か。
第一に。商品化した時に違和感なく社会に溶け込めるか、のテスト。これは、実験が始まった当初から、飛鳥自信も納得がいくほどの大成功。ネネが自分のクラスでどんな生活を送っていたかはうかがい知ることは出来ないが、少なくとも飛鳥の周辺の人間は、飛鳥の妹だということを疑わなかった。だからこそ、あの傷害事件も発生したわけである。
第二に。ネネに、理性を持たせること。和飛の言う理性というのは、自分のために、という欲望を行動理念として行動すること。ロボット工学三原則を壊し、理性で行動する意識。これが芽生えてこそ、ネネは真に人間に近づくことが出来る、と。この目的も。
「父さん的には、成功、なんじゃないかな」
確かに、歪ではあるがネネは自分のために行動した。飛鳥に恋するあまり、その恋敵たる瑠璃を傷付け、挙句、殺してしまうかもしれない、とさえ言った。人間の汚い嫉妬の部分が、極端ではあるが、生まれていた。その意識に翻弄されていた。
しかし、ネネはそれを納得していないようだ。顔を上げ、ショックを受けたような表情で、赤い瞳の端に涙を湛えている。飛鳥は、

しまった、と思った。しかし、だからと言って失敗例と言えばよかったのか。
飛鳥は、思案するように頭を掻き、遊んでくれ、と言わんばかりに寄ってきた猫を両手で抱きあげた。
「僕も、ネネは成功例だと思うけどね。こんなにも人間にしか見えないロボット、成功例以外の何物でもない」
「こっ！　こんな、ケッカンロボットの、どこが！」
ネネが癇癪を起して卓袱台をバンっと叩いた。飛鳥は驚いて体を強張らせるも、猫からネネに視線を移すと、確かにこれは成功例だ、と飛鳥は冷静に、改めて思った。
かつて、和飛に言われて気付いた、ネネの不自然な従順さ。今はそんな従順さも無く、飛鳥に歯向かい、喧嘩をしようとしている。
これの、どこがロボットだというのだ。一人の、我儘な女の子じゃないか。
胡坐をかいた脚の上に乗った猫の肉球をプニプニと弄りながら、ネネを見据えた。
「そんな悲しいこと言うなよ。僕的には、ネネがいてくれて、すごく助かってたんだ。少なくとも僕の中では、ネネには欠陥なんてないと思ってる。……なあ、ネネ。結局、何しに来たんだ？　僕に欠陥ロボットだって肯定してもらいに来たのか？　だったら願い下げなんだけど。妹を、欠陥商品扱いは、したくない」
「ちっ、違う、違う、の……」
酷く冷静な飛鳥の姿をみてネネは少し怖じ気づいている。しかし、言葉を選びながら、続けて口を開く。
「ねっ、ネネが、成功例、でさ。その。成功したら、ネネみたいなロボットを、商品化しよう、って話になってるの」
開発し。実験し。それが成功したら世に出す。至って普通のことである。飛鳥は、ネネの考えが全く読めず、首を軽く傾げた。
「うん。それで？」
「おっ、おにいちゃん、にさ。ハカセを止めるのを、手伝ってほし

いんだ」
「……どうして」
「だって。ね、ネネみたいなロボットが世の中に出て行って……今回と、同じようなことが起こったら？　持ち主の人に恋しちゃったりしてさ……。幸せに、なれない子が、沢山出てきちゃうと思うんだ」
　ネネと同様の思考が出来るロボットならば、当然、人間に恋をする確率だって十分あり得る。しかし、ロボットが人間に恋して、幸せになれるビジョンは、残念ながら見当たらない。ネネに、恋人になってくれるか、と問われ、即答出来なかった事実が、その証拠として飛鳥の思考に張り付いている。
「それにさ。恋愛だけじゃないよ。ネネは”モノ”だからさ。人間扱いしてくれないような持ち主だって出てくるよ、きっと。どんなに酷いことされても、何も出来ない」
　ロボットは当然、人間じゃないから人権など持たない。最悪、殺されても、犯罪にはならない。どんなことをしても、許されるのだ。
　飛鳥は、絶句した。確かにそうだ。そもそも今の日本では、いや、世界中どんな国でも、法整備をしなければ、人間に近いロボットが普通に暮らしていけるわけがないのだ。
「そ、そんなの、ネネ、嫌だよ。ネネの妹達が、酷いことされるなんて！」
「父さんに、ネネは言った？　そのことを」
「い、言ったよ！　言ったけど、その、聞いて、くれなくて」
　自分の意思は貫き通す、頑固な部分を持つ和飛。なるほど、ネネの訴えは左から入って右から出て行くようなものだ。我が父ながら、大人気ない、と思った。
　そしておそらくは、飛鳥が言っても聞きはしないだろう。
「……母さん。いや、母さんは父さんの仕事に関しては完全ノータッチだし、言ったとしても最悪父さんに論破される……」
「だ、だからね、おにいちゃん」

飛鳥が悩んでいると、ネネは先ほどまでの弱々しい表情から、意思の強そうな表情に変わって、膝立ちになって飛鳥の方へ乗り出してきた。
「おにいちゃんに、手伝ってほしいの。口で言ってだめなら、その、実力行使、でさ」
「実力、行使？　なんだよ。刃物持って研究所に殴りこむのか？」
飛鳥がちょっと引き気味に言うと、ネネは悪戯っぽい笑みを浮かべたのである。こんなネネの表情、随分久しぶりなような気がした。
そして、言い聞かせるように。
「ク・ラ・ッ・キ・ン・グ、だよ。おにいちゃん」

ロボット少女は恋をする（１１）

「く、クラッキングぅ！？　おいちょっと待て！　それは普通に犯罪だろ！」

ネネの言葉を聞いて、飛鳥は素っ頓狂な声を上げた。当たり前だ。今ネネは、自分に犯罪を犯せと言っているようなものだ。

クラッキング。すなわち、研究所の計算機に侵入して、何かしらを破壊しろ、ということ。

「そうだね。おにいちゃんがやれば、それは犯罪だね」

ネネは、しかし何か面白いものを見ているかのような笑みを浮かべ、浮かしていた腰を下ろした。

「勿論、ネネがやるよ。そもそもネネは人間じゃないから人間の犯罪は適用されないし。それに、試作品のネネにクラックされてもさ、それはハカセのプログラミングが悪いって言い張れる。ハカセの自業自得だよ。プログラムのバグで、大事なものが消えちゃうっていうのは、よくあるよね？」

確かによくある。飛鳥も、自作プログラムのバグで変なところを参照、上書きしてしまってシステムファイルを破壊してしまった経験もある。

成程。ネネ、という社会的なイレギュラーの存在によって、法の抜け道はいくらでも開いているということだ。

「おにいちゃんはさ。パソコンを、“強く”してほしいんだ。さすがにネネの頭だけじゃ、演算能力が足りないからさ。それだけでいい。おにいちゃんは何も知らなかった。ただ、クラッキングの直前に“偶然”パソコンをアップグレードしただけ、って言い張ればいい」

研究所をクラックする。それはつまり、研究用の高性能計算機を相手に戦うということだ。飛鳥の自作デスクトップパソコンも、所詮はそこそこの性能の民間普及型のパーツを使って組んでいるだけ。

ならば、全てのパーツを極限まで強くすれば、あるいは。
ネネの悪魔のような誘惑に、飛鳥はだんだんと乗り気になってきた。
パソコンマニアな飛鳥にとって、ハッキング、クラッキングというのは、一度やってみたいものではある。そして、ネネが、安全にそれを行うためのお膳立てをしてくれる、というのだ。
「ね？　お願い」
「……いいよ」
と。あまり悩みもせずに返答。
何よりも。
「大事な大事な妹の願いだ。聞かないと、男が廃るっていうもんだ」
「ありがとう！　おにいちゃん！」
「ああ、でも、パソコンをアップグレードするのにもお金が……」
いくらパーツの値下がりが続いていると言っても、あまり需要の無い“高性能すぎる”パーツの値段は相変わらず高い。今飛鳥の貯金通帳には、先月の研究補助金として振り込まれた二十万円を足しても、二十五万程度しかない。本気でやるには、足りない気がする。ＣＰＵ一つでも、普通にパソコンショップで売っているもので一番高性能なものは十万を下らないはずだ。
「それなら大丈夫！」
ネネが、また悪戯っぽい笑みを浮かべ、床に転がしてあった自分の鞄を漁って、卓袱台の上に一冊の通帳を置いた。
「ハカセのヘソクリ」
飛鳥は盛大に噴き出した。
非常に親不孝なことである。しかし、和飛のお金で、和飛に痛い目を合わせる。傍若無人な和飛に対して溜まっているフラストレーションを思い切りぶつけることが出来るのだ。成功したときはどれほど気持ちいいだろう。それを思い、飛鳥はほくそ笑んだ。この状況、楽しすぎる。
こうして、父親に対する息子と娘の、ささやかというには大きす

ぎる悪戯が開始されたのである。

ロボット少女は恋をする（１２）

脱衣場からネネが出てくる。
「おにいちゃんあがったー」
かつて一緒に生活していた時と同じサイクル。
交代することを告げながら、居間のドアを開けると、フローリングの上に二つ並んだ布団の一つで、飛鳥は仰向けで横になって、口を開けて眠っていた。
瑠璃とデートしていた、と先ほど聞いた。きっと気疲れしたのだろう。放っておいてあげるのがいい、と思いながら、ネネはその隣の布団に座り込んだ。
「……」
数度、飛鳥を流し見しながら、無意識のうちに思考の渦へと入って行く。
飛鳥を諦めて、一度は別れを告げたネネであったが、秘めている飛鳥への想いは変わっていない。
しかし、こうして戻ってきても、もう飛鳥は、元々手の届かない場所にいたのに、更に遠くへと行ってしまっている。
悔しかった。分かり切っていたことだけど、嫌だった。本音を言うと、瑠璃に対する嫉妬心は増大してしまっている。
飛鳥の顔を見て、一つの欲が、鎌首をもたげて行くのを感じた。
一度だけ。一度だけなら、いいよね。寝てるし。そうして自分に言い訳をしながら、ネネは飛鳥の方へ、まるで猫のように四つん這いで近づいていく。
無防備すぎる、飛鳥の姿。機会は今しか無い。ネネは、衝動に駆られるまま、飛鳥へ忍び寄る。
「……おにい、ちゃん？」
一言、飛鳥を呼んでみて、起きないことを確認して。飛鳥の寝顔に、顔を近づけていく。

垂れてくる湿った髪を右手で掻き上げる。
やがて、距離がゼロになる。飛鳥の下唇を唇で食むように押し付ける。
啄ばむように、二度、三度と拙いキスを繰り返していく。
そうして繰り返すにつれ、別の衝動に駆られた。
しかし、これ以上はダメだ、と、自制するよう、顔を離した。自然と溢れ出た涙が、布団に零れ落ちる。
「ふっ……うぅ……」
どうしようもない絶望感に打ちひしがれ、啜り泣きながら、ネネは枕元のリモコンで照明を落とした。両手で濡れた頬を擦り、横になり、すぐにシステムをスリープモードへ。

十数秒後。それを確認した飛鳥が、上半身を起こした。まだ生温かい湿った感触のある唇を触り、真っ赤になった顔で、こちらに背を向けて寝ているネネの後ろ姿を見た。
最初から起きていたわけではないが、流石に眠りが浅い状態で何度も唇に物が当たると目が覚めるというものだ。それが何だったのか気付いたのは、ネネが離れてからであるが。
邪念を払うように頭を振って、立ち上がる。
知らない振りをしよう。もう自分の選択肢はもう通り過ぎている。今更揺らぐようなことは有り得ない。
飛鳥は一つため息をついて、入浴のために居間から出て行った。

ロボット少女は恋をする（１３）

やはり特殊なパーツというものは普通のパソコンショップには置いていないわけで、ネットも利用することとなった。

結局、準備が整ったのは三日後のことである。

「見よ！　この１６連４ＧＢメモリを！　１０コアＣＰＵを！　これで我が家の電気代は大変なことになるぜ―っ！」

飛鳥が学校に行っている間に届いたパソコンパーツを家で待機していたネネが受け取り、学校から帰ってきた飛鳥がそれを組み込み、数十万の出費（全て和飛のヘソクリから）の末に完成した”ぼくのかんがえたさいきょうのぱそこん”を前にテンションが振り切れた飛鳥は、まるで子供のようにはしゃぎ回っている。こんな姿、近年誰にも見せたことはないが、それだけ凄いものを手に入れてしまったのであろう。

「おおー」

ネネに拍手されて鼻高々な飛鳥は、腰に手を当てて思い切り胸を張った。

「で！　いつやるんだ？」

すっかりノリノリになっている飛鳥は、目をキラキラさせてネネに問うと、ネネはちょっと引き気味になりながら答える。

「んー。やっぱり夜だよね。奇襲は夜にするべきだよ、やっぱり。あの研究所、夜は稼働してないもの」

残業の発生は企業の仕事の管理体制がクソだから起こる、という和飛の持論から、研究所は夜間は完全に閉まるはず、とのことである。

「そっかー。じゃ、夜ご飯にするかー」

「……うん。買い物、行こう！」

こうして、研究所への攻撃は夜と決まり、飛鳥の提案から、ネネはいつもの元気な声で答えた。しかしその瞳に、少しの憂いを湛え

て。
飛鳥は部屋着からラフな外出用の夏服に着替え、ポケットに財布を突っ込んだ。玄関先で、先に居間を出たネネが待っていた。
通路に出てドアを閉め、施錠し、歩きはじめる。
「ん？」
シャツの裾に違和感を感じて、見てみると、ネネが小さな手で裾を握りしめていた。飛鳥の視線に気付くと、ネネは少し頬を染めてはにかむ。
「えへへ。デートデート」
飛鳥は、つられて頬を緩めつつ、しかし、そのネネの空虚さに、少しだけ心が痛んだ。
ごめん、と言おうとして、やめた。自分とネネは、兄妹だ。こんなことを気にする必要なんてない。
そう言い聞かせ、エレベーターに乗り込む。
そういえば。この悪戯が終わって、和飛が量産を諦めたとして。ネネは、自分のもとを去るのだろうか、と飛鳥は考えた。順当に考えれば、きっとネネはまた去っていく。その方が、ネネも、自分も、傷がつかなくて済むと思う。
「今日はさ。僕も夕飯作るよ」
だったら、きっとこの夕飯は、ネネと食べる最後の晩餐だろう。いや、ネネは研究所に帰るだけだ。きっと将来的にはまたネネと出会ったりして、一緒にご飯を食べたりするだろう。まあ、一時的な別れの前くらい、一緒に作ろう。この前は唐突過ぎて何も出来ないままだった。
「本当？」
「うん。僕だって結構ネネの味を参考にしてさ。だいぶ素材の味を生かした料理を作れるようになったんだからな」
「じゃあ、今日はうんと御馳走作ろう！」
「ああ」

ロボット少女は恋をする（１４）

一緒に、ちょっと豪華な夕食を作って。久々に賑やかな夕食を共に過ごし。ついでだからとお風呂にも交代で入って、寝間着に着替えてから、パソコンを立ち上げた。

「……すごい根本的な事聞くけどさ。ネネってどうやってパソコンと接続するの？」

よく考えると、パソコンを強くしてもそのパソコンと接続出来なかったら意味が無いというものだ。

それを聞いたネネは、右手を首の後ろに当てて弄り始めた。

「うーんと。ここに、ソケットがね……あ、あった」

首の後ろの部分が大きく開き、ＵＳＢ端子他色々な端子が現れる。

飛鳥はちょっとその意外なグロテスクさに顔をしかめた。こういう視覚的なロボット要素が今まで皆無であったことも、その違和感を助長する。

「ね、ネネはＵＳＢ機器なのかー」

言いながら、ＵＳＢケーブルを接続してみると、パソコンの右下にバルーンが出現。

『新しいＵＳＢデバイスが接続されました』

そのシュールさに、飛鳥は思わず噴き出した。

それを見たネネがちょっとだけ不服そうに頬を膨らませる。

「必要なんだからね！　データのバックアップとかウイルスチェックとか！」

「分かってる、分かってるぞ」

ククク、と笑いを堪えながら、ドライバがインストールされるのを待つ。

『ＵＳＢデバイスを使用する準備が出来ました』

「ぶあっはっはっはっは！」

「むー！　笑わないでよーっ！」

「押していい！？　このマイコンピュータに出てきたＮＥＮＥっていうの押していい！？　ははははは！」
「わ、笑うなーっ！　おにいちゃんのばかぁーっ！」
ネネの拳骨が、飛鳥の頬に直撃した。

「さて。やるか」
割と本気で殴られた飛鳥は、腫れた頬の痛みを我慢しながら、大真面目な表情でパソコンの前で腕まくりをし。
「……なあ。僕、何すればいいの？」
再びよく考えると、具体的にどんなソフトを使うのかも知らない。ネットに落ちてるようなハッキングツールで研究所のシステムを落とすのは難しいだろうし。
「？　特に何もないけど」
それがどうかした？と言わんばかりのネネに、飛鳥は苦笑いで固まった。確かにネネは、最初に言ったではないか。飛鳥がするのは、パソコンのアップグレードだ、と。
「おおおおお……」
正直に言うと、相当ショックだった。この日のために過剰なまでにスペックを向上したのに、それを自分で使役出来ないとは。
「じゃあ、おにいちゃんはネネの椅子になってよ。きっと、体の制御が出来なくなるからさ」
言いながら、ネネは、胡坐をかいて据わっている飛鳥の膝の上に座った。ちょっと照れたように、えへへ、と笑った後、パソコンの方に向き直って目を瞑った。
「……お」
デスクトップ上にコマンドプロンプトが複数現れ、何かよくわからない処理が並列で開始された。飛鳥なら読めば分かるのだろうが、流れるのが早すぎてついていけない。
完全に蚊帳の外に置かれた飛鳥は、微妙に居心地悪そうに頭を掻

いた。

ロボット少女は恋をする（１５）

パソコンの右下に表示してあるパフォーマンスモニタが、パソコンへの負荷がどんどん上がっていることを示す。使用率の折れ線グラフがどんどん上昇していくのが見て取れた。

コマンドプロンプトを次々流れていくコマンドを断片的に読み取ってみると、どうやら接続を繰り返し試みているように見受けられる。

「おいおい、そんな派手に動いていいのかよ？」

少なくともあまりスマートなやり方とは到底思えない。

『いいの。どうせハカセにはばれてる』

唐突に追加で現れたコマンドプロンプトに、そんな言葉が表示される。ギョッとした。それがネネの言葉であることに数秒のラグを伴って理解する。

具体的に口から発音するよりも、パソコンにテキストを表示させる指令を送る方が処理が少ないと言えるのだろう。つまり、今のネネにはそれをする余裕すらないということだ。この飛鳥謹製のパソコンですら、この高負荷であるのに。

服越しに伝わってくるネネの熱。普段ならば内部で完結し、体表に伝わる熱を操作することで体温を演出する余裕すらある冷却機能ですら、作業が間に合っていないのだろう。

まだ火傷するほどではないが、既に人間の体温よりは遥かに高くなっている。

パソコン側のプロセッサ温度も上昇しているのがモニタから分かる。もう少し冷却効率を考えた方が良かったか、と冷静な頭で考えた。メモリを１６個も入れているせいで、内部はかなり圧迫されているのは事実。

手持無沙汰である。忙しなく動き回るパソコンのモニターを暫くジッと見つめていた、その時。

「ぐっ！」
突然、ネネが体を痙攣させた。体を仰け反らせて一瞬見えたその表情は、瞳を大きく見開き、驚愕と苦痛の色に染まっていた。
「えっ？」
その反動で、そのまま前方へ倒れこみ、パソコンデスクに額を強くぶつけ、鈍い打撃音が響き渡った。
唖然とする飛鳥の耳に、パソコンから、あまり聞きたくない不快な警告音が断続的に発せられ、正体不明の警告を示すウィンドウの羅列が現れた。
こんな異常状態、プログラムのバグイルスくらいしか思いつかない。そしてこの場合、どう考えても原因は後者である。
「お、おい！　ネネ！　ネネ！」
ネネの肩を持って揺さぶってみるが、ネネはピクリとも動いてくれない。
忌々しげに舌打ちし、飛鳥はパソコンからネネを取り外す操作を行った。正常に動作してくれるかどうか心配だったが、その心配を余所に、普通にパソコンから切り離すことに成功する。
重いネネの体を四苦八苦しながら傍に敷いてあった布団の上に寝かせた。
さてどうしたものか、と考え、パソコンは念のために取っておいた復元ポイントまで戻す操作を行った。
問題は、ネネだった。パソコン用のウイルスならば検出出来るだろうが、ネネの動作に直接影響してくるウイルスなど。
とりあえず、メインのパソコンは復元作業中。予備として置いてあるノートパソコンを持ちだしてくる。
電源を入れ、ネネを接続してみると、一応は正常に認識してくれた。先ほど笑ってしまったメッセージが、今はどれだけ飛鳥を安心させてくれたことか。
しかしこれ以降どうすればいいのか、と考え、先ほどのネネの台詞が思い出された。

――必要なんだからね！　データのバックアップとかウイルスチェックとか！

成程。しかしそのためのソフトなど知らない。

ひょっとしてネネに搭載されてないかな、と、『ＮＥＮＥ』というデバイスの中身を開いてみることにすると、意外にも普通のパソコンで使えそうなソフトのショートカットが置かれていた。

当然と言えば当然である。商品化を考えているのだから、持ち主たる人間が整備しやすいようになっているのだろう。

祈るような思いで、診断ツールっぽいショートカットを押してみると、パソコン上で何かしらの処理が始まった。残り時間を示すバーが表示されているが、少し時間がかかるようだ。

しかし、冷や冷やしたが、何とか持ち直せそうだ、と安堵の息を吐いた。

体を投げ出し、ネネの熱と先ほどまでの焦燥で熱を持った体を冷やすように流れ出た顔の汗を二の腕で拭い、両足を投げ出した。

この時の飛鳥は、微塵にも思っていなかった。上手く行き過ぎている、と。

ロボット少女は恋をする（１６）

「オニイチャン」
「うひゃぁ！？」
三十分ほどだろうか。ネネが、酷く機械音声じみた無機質な声を上げ、復元ポイントに戻したパソコンのセットアップをする飛鳥を驚かせた。
後ろを向くと、布団の上で仰向けになって身じろぎひとつせず、ただ目を開けて天井を見据えたままのネネが、そこにいた。
その姿を見て、飛鳥はゾッとした。マネキン人形のような、不気味なまでな無表情。
「パスワード、カイセキシテ、セキュリティ、ヤブッタシュンカンニ、ナンカ、メノマエガマックラニナッテ」
更に、そのネネの話しぶり。ただでさえ不気味な機械音声の上に、一応話をしているという演出のつもりなのだろう。口を動かしてはいるが、その動きは台詞と全くかみ合わず、一定間隔でパクパク口を開いたり閉じたりするだけ。出来の悪いプレゼンテーションロボットのような有様である。
「ツナイデ、オニイチャン。モウ、ヘマハシナイカラ」
「……待ってろ。今いかれたパソコンを使えるようにしてるから」
そんなネネから顔をそむけたくて。言いながら、ふと診断ツールを走らせていたノートパソコンを見て、絶句した。
「って」
どこが悪い、というのが一目でわかるような、人を正面から見たものと横から見たもののシルエットが映し出され、しかしその体の各部から伸びる噴き出し状のメッセージスペースは、『ＥＲＲＯＲ』の五文字で埋め尽くされていた。
「お、おい！　何でこんなにボロボロなんだよ！　おかしいだろ！」
「カイセキ、ダケデ、ケッコウ、フカガ。ソレニ、タブンウイルス

ナンダロウケド、カラダジュウニ、イジョウ、ナ、デンリュウガ、ナガレテ、カイロガショートシチャッタ。デモ、アトヒトフンバリナンダ。アタマ、ハ、イキテルカラ」

外に意思を示す唯一の手段である口を、カクカクとからくり人形のように動かしながら、ネネが嘆願する。

正直言うと、飛鳥はもうやめさせたかった。これ以上負荷をかけたら十中八九、ネネは壊れる。もう、当初の決意など無くなっていた。こんな惨めすぎるネネの姿を、見たくは無かった。

しかし。ここでやめたら、意味がなくなってしまう。ここまで来たのに、引き返すことなど出来ない。飛鳥は、振り返らずに、進むしかないのだ。

熱を帯びたネネの体を、力ずくで抱き上げ、パソコンの前に座り直す。先ほどと同じ姿勢で。ただ、ネネはもう体を支える力など無い。ネネの上半身の重さが全て飛鳥にかかる。

目を閉じることもせず、ただ斜め下一点を見つめ続けるネネの首から伸びたＵＳＢケーブルを、セットアップが済んだパソコンへ差す。

同時に。ネネの意思が飛んでいく。破壊する意思が。遠く離れた研究所のシステムを、侵食する。

ファイルの消去を示すコマンドが次々に流れて行く。

ロボット少女は恋をする（17）

結論を言うと、ネネは壊れた。
研究所にある、人型情報端末の管理システムを道連れにした、はずだ。少なくとも飛鳥にはそう見えた。
「オワ……ッタヨ、……オニ……イチャン」
そして。酷くたどたどしく、更にノイズさえ乗っている声でネネがそう言うのだ。間違いないはずだ。少なくとも、飛鳥が確かめる術は無い。
「ああ、分かった、分かったから、その、直してもらおう！　父さんに！」
「イヤ」
ネネの、冷酷な、有無を言わさない拒絶の言葉が、飛鳥に突き刺さる。
「えっ！」
「ネネ、モウロ……ボットハ、イヤダモ……ン。ニンゲン、ノカタチ、シテタラ……キット……オニイチャンノコト、アキラメラレナイモン。キットマタ、ネネノセイデ、オニイチャン、メイワク」
「そ、そんなこと……！」
「ソレニ、ハカセ、シュウリトショウシテ、エッチナコトヲ」
ちょっとだけ。機械音声に、おどけたような色が混じった、気がした。それはきっと、半分本音、半分冗談なのだろう。
飛鳥は、脱力した。この期に及んで、そんなことを言えるネネの強さに、感服した。もう、いいや、という気持ちになった。
「そ、そう、か」
後ろから、ネネの、そろそろ火傷しそうなほど熱い体を抱きしめた。今、飛鳥に出来るのはこれだけだった。
「チョット、ツカレチャッタ。チョットダケ、システムヲヤスマセルネ？」

その言葉はきっと、別れの言葉。それを感じ取った飛鳥は、一気に涙腺が熱くなるのを感じた。今、目の前で、腕の中で、ネネと言う存在が、消え去ろうとしている。
「ね、ネネ！」
「オヤスミ、オニイチャン」
「ネネ！　ネネ！」
だがしかし、ネネは答えなかった。
その返答の代わりのように。携帯電話の着信音が鳴った。発信元は、孔雀蓮和飛であった。

「……もしもし」
今にも泣きそうな、震えた声で応答する。忌々しいまでに、無感情な和飛の言葉が返ってくる。
『どうだ、ネネは』
「こっ！　壊れたよ！」
その、激情をぶつける飛鳥の声はしかし、まるで深淵のような和飛の声に吸い込まれた
『ふむ。では、これで人型情報端末試作機『ネネ』は完成としよう』
冷徹なまでに、科学者の声だった。実験結果を公表する、淡々とした、無感情。
「な、ん……」
『では、この《実験》について、話をする』
「じっ……けん？」
『ネネのクラッキングは、全てサンドボックスの中で行われた』
「な……！」
サンドボックス。それは、システムから隔離された領域でプログラムを動作させることによって、プログラムが暴走しても、また、万が一ウイルスが混入していても、システムに影響を与えないようにするセキュリティ手法のこと。そしてこの場合のサンドボックスというのは、人型情報端末の管理システムからは隔離された場所、

という意味でのサンドボックス。
『ネネ、そしてお前のパソコンのＩＰアドレスからこちらへ来る通信は全てサンドボックスへ通じるように操作した。……ネネはサンドボックス内にに置かれた、ダミーの管理システムを破壊した。ただそれだけの事だ』
ネネが自らを破壊してまで、破壊した管理システムは、結局壊れていなかった。ネネは、壊した、と、誤認していたのだ。
「じゃ、じゃあ、ネネは犬死じゃないか！」
『大体にして。私が構築したシステムが、私が作ったネネに破られるわけがないだろう。ネネの計算能力では、こちらのセキュリティを破ることは、理論上不可能だ。まあ、その理論を越え、ネネは理性を手に入れたわけであるが、それもプログラムが進化したもの。プロセッサの能力を上げるには、交換するしかない。そしてネネに積んでいるプロセッサでは、セキュリティを破ることは出来ない』
愕然とした。全ては和飛の掌の上で転がされていたことだったのだ。意図的に弱いセキュリティを張り、ネネに侵入させたのだ。そして、無意味なクラッキングをさせた。
大体にして、攻撃して、パスワードを盗み出して。その状態で数十分放置している時点でおかしいと思うべきだったのだ。
「あっ、あんたそれでも人間か！　一体なんのためにそんな！」
『聞け、飛鳥』
その声は、科学者の物ではなかった。一人の父親が、駄々をこねる子供に言い聞かせるような、やわらかい口調だった。
『ネネは一度、壊れてるんだ』
「……は？」
その意外な台詞に、飛鳥は茫然自失した。壊れて、今は腕の中で動かなくなっているネネを、上から見つめる。
『そうだな。お前の家からこっちに帰って、二日ほどした時だ。ネネは、研究所の屋上から飛び降りてバラバラになった』
絶句した。しかし、心当たりは、いくらでもあった。飛鳥の家を

出て行く直前の、ネネのネガティヴさは、人間ならば自ら命を断ってもおかしくなかったかもしれない。
『結果的に、ネネは一つだけ残っていたロボット工学三原則、第三条、ロボットは自らを守らなければならない、を破壊したわけだが、しかしそんなもの、もう副産物でしかない。私も完全に予想外だった。大体にして、自ら命を断つような人間は、人間としても欠陥品だ。有り得ない。……理性のようなものが芽生えていたから、ネネの記憶、思考パターンのバックアップは取っていた。だから、ネネには今は自殺の記憶は残っていない。しかし、もう状況は変えられないと悟ったよ。再び自殺することは目に見えていた。だからせめて、死に場所を、与えてあげたかった。本人も、ロボットの体を嫌がっていたし。……自殺なんて、あんまりだろう。ネネが納得する、死ぬ、大義名分を与えたかった』
「も、もしかして、人型情報端末を近いうちに量産するって話は……」
『完全な作り話、というわけではないがね。将来的にはそうするつもりだ。しかし、今のところはまだ絵空事の段階。ネネの主張は全く正しい。社会が、ついてこれないんだよ、人型情報端末という存在にね』
「じゃ、じゃあ、あのネネへの攻撃は！　あのウイルスみたいなのは！　そこまでする必要あったのか！？」
『苦労して、苦労して、やっと管理システムを破壊した。後続の量産機達を守れた。その、達成感、ていうのか。それを演出したかった。あそこで飛鳥がネネの中身を見るかは正直賭けだった。しかし、事前に言っていたら、どうせお前は色々とごねただろうし、何よりも、“彼女”を泣かせることにもなるかもしれなかっただろ？　ネネに走ってさ。それだけは避けたかった。自分が作ったロボットで、人の仲を引き裂くようなことはしたくなかった。だから黙っていた』
残念ながら。和飛の言葉は全く正しい。事前に言われていたら絶対にこんなことさせていない。

『……ネネは最後の最後で、量産機達を助けるための自己犠牲、という形の、理性よりも人間らしい感覚を芽生えさせて、壊れた。主人でも何でもない存在を守るために！　どうだ、どこからどう見ても人間しか出来ない行動だ！　ネネは、完成している！　完全に！』

「ネネは、完成と同時に、壊れた」

『そう。それに、ネネという存在に与えられていた、社会に溶け込むこと、そして、ロボット工学三原則を破る、という役割。その役割を、完璧にこなした。ネネという一つの存在は、完璧に完成している。ネネは十分すぎるほど、役に立ってくれた。だから、手段こそ茶番劇ではあるが、決して犬死ではない。胸を張って自慢したい、立派な”娘”だよ。……しかし、人型情報端末という存在に対する課題は、まだまだ沢山残っている。今後は、その課題を潰していくことが、人型情報端末の開発に求められていること。……量産態勢は、程遠いよ』

「……あんた、狂ってる」

『そうだな。お前が羨ましいよ。技術者としてはド三流でぶん殴りたくなってくるが、人間としては超一流だ』

「……あんたにはもう、ネネは触らせない。僕が、ネネを助ける。真の意味で！」

『そうだ。それでいい。私にはそれをする資格など無い。……親父なんて超えるものだ。私よりも優秀な技術者となり、やがては人型情報端末と人間が、健全に共存する社会を作ってくれ』

「分かってるよ！」

飛鳥は吐き捨てるようにそう言って、通話を切り。そして、携帯電話を、フローリングの床にたたき付けた。電池パックが飛び出し、液晶にヒビが入った。

ネネが自らが壊れてまでして破壊したものが、実は何の意味も成していなかった。すべて、開発者たる和飛の手のひらの上で行われたことだった。。

確かに、和飛の主張は、分かる。しかし、それをはいそうですか

と、受け入れることは出来なかった。
なんて。なんて、胸糞の悪い話なのだろう。

ロボット少女がいない日常

「じゃーなー！　ちゃんと瑠璃の世話してくれよー！」
月代が手を振りながらそう言い、詠輝と並んで歩いていくのを、飛鳥は見送った。もう新幹線も止まっている。きっとその辺のホテルにでも泊まるつもりなのだろう。
「あはー、じゃーねー、つきよー」
そして、その隣で。飛鳥に半ば抱き抱えられるようにして辛うじて立っている瑠璃が、アホみたいに明るい笑顔で、右手をぶんぶん振り回した。その手が飛鳥にダイレクトヒットするが、全然気にしていない。
「ほら瑠璃っ！　帰るぞ！　しっかり歩け！」
言いつつ、しかしその言葉が全く聞き届けられないことは分かっている。飛鳥は、瑠璃に肩を貸した状態で、ゆっくりと歩き始めた。
異常気象による豪雪。夕方から降り始めた雪は、この時間になると街を三十センチも覆い尽くしていた。歩くたびに、スニーカーの中に雪が入って大変気持ち悪い。
「きゃはは！　つめたいよぉぉー？」
隣で瑠璃が、はしゃぐように甲高い声笑い声を上げる。飛鳥はその隣でため息をついた。
チェーンを巻いた車が車道を走っていく。路面状況や、時間からして、もうほとんど車は走っていない。ただ、時々瑠璃が意味も無く爆笑する声だけが、寝静まった街に響き渡る。
「うおっ！　いてえ！」
瑠璃が隣で足を滑らせ、飛鳥を道連れにして地面に尻もちをついた。しかしそんなこと気にせずに、何がおかしいのか瑠璃は笑っている。
飛鳥は何度目か分からないため息をついて立ち上がり、丁度近くにあったジュースの自販機に向かった。自分用にあったかいコーヒ

ーを買い、更にお金を投入。
「瑠璃何がいぐはぁっ！？」
目の前が真っ白になった。ズボンがグジャグジャに濡れることも気にせずに尻もちをついたまま、その辺の雪を集めて作った雪玉を投擲してきたのである。
「きゃはははは！　私のかちー！」
もう、未来永劫瑠璃に酒は飲ませない。そう決心した飛鳥は、自分と同じコーヒーを黙って購入するのであった。

――八年が経っていた。
飛鳥は国立大学の工学部を卒業し、今は孔雀蓮ロボット研究所で研究員をしていた。完全に親のコネであるかと思われがちであるが、就職活動ではそこそこの企業から複数の内定を貰っていたのだ。しかし、結局ロボット研究の最先端を行くのは孔雀蓮ロボット研究所であったわけで、内定を全て蹴るという伝説を残してしまった。
そして瑠璃はというと、短大を卒業して、今は飛鳥と共にロボット研究所のある県に移り住み、市立図書館の司書という、あまりにも順当すぎる職業に就いている。ついでに言うと、戸籍上、彼女は先月から、四柳瑠璃ではなく、孔雀蓮瑠璃であった。
更についでに言うと、月代と詠輝は、割と早い段階で結婚していた。結局、クラスメイト４人組の中で綺麗に二つに分かれた状態となったわけだ。

瑠璃が務めている市立図書館に程近いマンションに、二人は居を構えている。
結局、そのまま寝てしまった瑠璃を背負って家に帰ってきた飛鳥は、寝室のベッドに琉璃を寝かせた。
そして寝室を出て、専門書の山に埋もれかけているパソコンスペースに直行した。

ネネの置き土産とも言うべき、大人になって随分と大きくなった猫を椅子から追い払い、休止状態にしていたパソコンを起動。
立ち上がった画面に、コマンドプロンプトが表示される。そして、何かしらのプログラムが勝手に走り始めた。
『おはよう、おにいちゃん』
そして、一言そう表示される。飛鳥は、それに答えるように、キーボードをたたいた。
『おはよう。どうだ、気分は？』
『良好だよ？　ちょっとレジストリにゴミが多いかも。クリーンアップをお勧めするよ』
『そうか、ありがとう。あとで見とくよ』
それは、ネネ。いや、実際にはネネではなく、ネネを模した人工知能であった。
研究所へのクラッキングの負荷で壊れたネネの断片を取り出し、整形したものである。
ネネという試作型の犠牲は、現在、和飛と飛鳥の親子共同で行われている人型情報端末開発に少なからず影響を与えている。
ネネは、人型情報端末と人間が健全に共存できる世界への足がかりであり、また、指標の一つであった。
飛鳥が和飛への宣言通り、自分の力だけでネネの意思を抽出し、パソコンという新しい形の体を与えて直したという行為が、決してネネの事を後悔しているセンチメンタリズムに起因しているわけではないと言える根拠が、そこにあった。
和飛がかつて言ったように、課題はたくさんある。特に大きなものが、社会基盤の変革であった。人型情報端末に人権に近しいものを与えなければ、ネネの意思が無駄になる。しかし、そんなこと、政治家にでもならない限り無理。いや、政治家になっても決して簡単なことではない。だが、やってみなければ始まらない、と、和飛は現在、選挙に出馬する準備を進めている。その行動力の凄まじさは、飛鳥が和飛の事を認める、数少ないファクターであった。

『おにいちゃん。瑠璃先輩との結婚式はいつ？』
『来年の二月だよ』
『そう……。ネネも行ければいいんだけど』
『何言ってんだよ。ノートパソコンに入れて持ってくに決まってるだろ』
『えっ！？』

『だって妹が兄の結婚式に来ないっておかしいだろ？』
何を今更。と、飛鳥はパソコンの前で鼻で笑った。

ロボット少女がいない日常（後書き）

おはようございます。こんにちわ。こんばんわ。はじめまして。くろうんもと申します。

私の拙作を読んでいただき、本当にありがとうございます。

私はロボット少女を始めとする人外少女が割と好きです。しかし、人外少女と普通の人間が恋愛をしたらどうなるか、を考えると、幸せになれるビジョンが思いつかないのです。これは作中でも飛鳥を通じて常々主張してきたことだと思います。

突っ走って行って、時間がたつとどうなるのかなあ、と考えてしまうのは、きっと私がひねくれているからでしょう。

結果として、こんな妥協案のようなものに軟着陸することになりました。不完全燃焼のように感じる方もいらっしゃるかと思われますが、こんな形もあるんだ、という程度に笑ってやってください。こんな形にしか出来ない私を、思いっきりバカにしてやってください。それが私の活力です（笑）

重ね重ね、ここまでお付き合いしていただいたことに、お礼を申し上げます。これからもよろしくお願いします。ではでは、今回はこの辺で。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7314s/

ロボット少女は恋をする

2011年6月8日00時27分発行